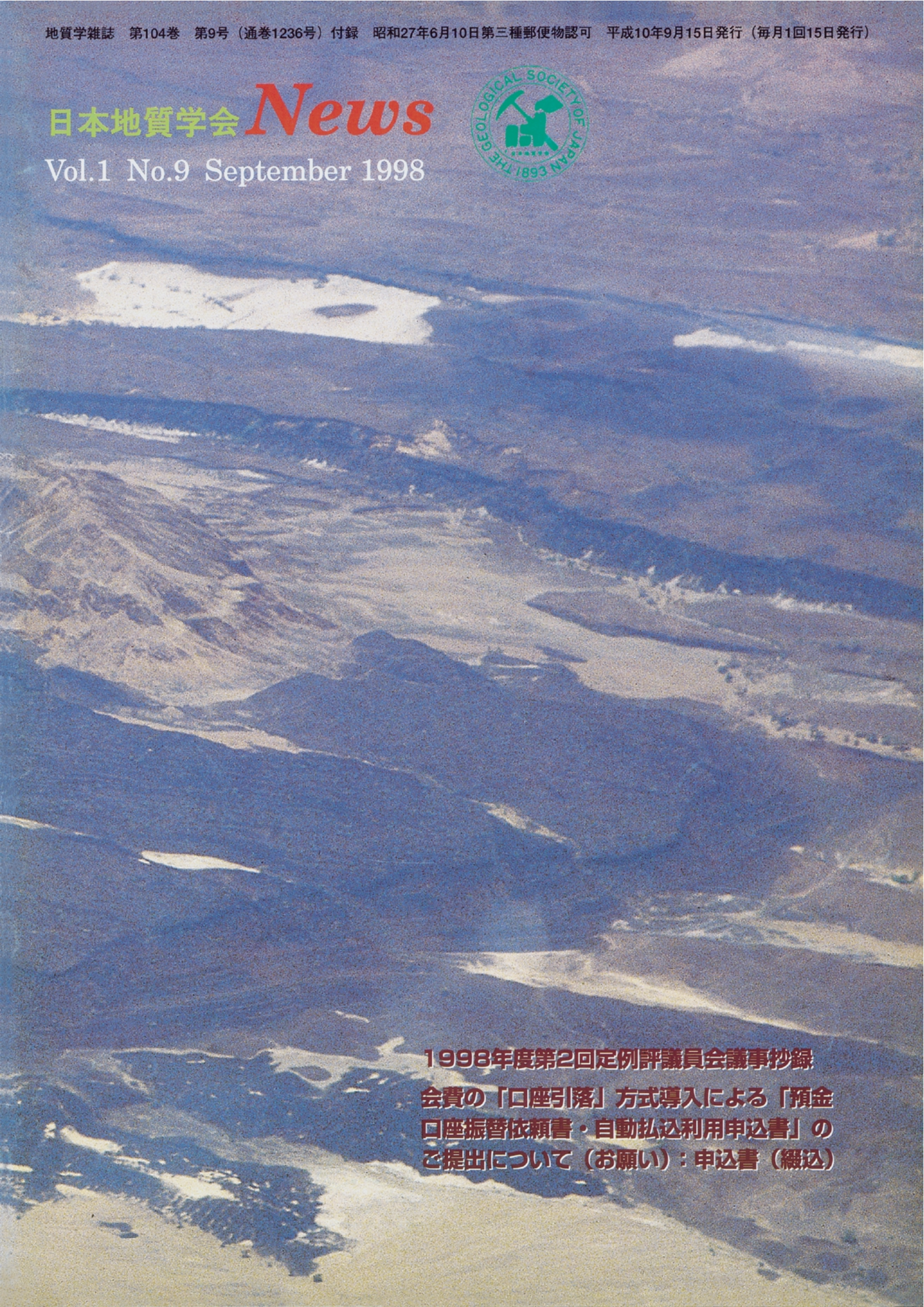
地質学雑誌　第104巻　第9号（通巻1236号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成10年9月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.1 No.9 September 1998



1998年度第2回定例評議員会議事抄録

会費の「口座引落」方式導入による「預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書」のご提出について（お願い）：申込書（綴込）

日本地質学会 *News* Vol.1 No.9 September 1998

The Geological Society of Japan *News* 日本地質学会／〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町1-10-4 丸石ビル
電話 03-3252-7242 Fax 03-5256-5676 E-mail : geosocjp@ra2.so-net.or.jp ホームページ http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj/

Contents

学協会・研究会報告
国際オフィオライト会議'98（オウル大学・フィンランド地質調査所共催）報告 石渡 明・中川 充……2
地学英語雑感⑦ 良いセンテンスをつくる―5 嶋崎吉彦……3
紹 介……4–6
相馬恒雄：富山のジオロジー―富山の大地の成り立ちを探る―（とやまライブラリー5）/町田 洋・白尾元理：写真でみる火山の自然史/ A. A.メイヤーホフほか 西村敬一・小玉喜三郎・矢野孝雄・小室裕明訳：サージテクトニクス 地球ダイナミクスの新仮説/新潟大学重油流出による海の汚染調査グループ：1997年1月ナホトカ号重油流出事故による新潟県下の重油漂着状況と環境汚染―調査研究報告書―（1998年3月）/寄贈本・紹介依頼本
ご案内……6–9
公開シンポジウム「日産財団 知の協演シンポジウム」「―水惑星地球の未来Ⅰ―」/「都市地震防災地盤図」に関するシンポジウム/教科「理科」関連学会協議会第3回シンポジウム「これからの理科教育に求めるもの」/「アジアにおける陸と海のリンク」物質輸送と地層形成に関する国際ワークショップのお知らせ/金沢大学創立50周年記念国際シンポジウム「地球―水―人間」
資料：第24回海洋地名打合会で決定された海底地形名 水野篤行……8
各賞・研究助成……9
第1回大学婦人協会守田科学研究奨励賞受賞候補者募集要項
公募 神戸大学 内海域機能教育研究センターの教官公募……9
地質学論集近刊案内 第50号「―構造地質 特別号―21世紀の構造地質学にむけて」……10
委員会だより 科研費問題検討小委員会：科研費申請有資格者会員の皆さまへ 文部省科研費補助金の申請について……11
専門部会コーナー 構造地質：Journal of Structural Geologyの日本地質学会・会員の個人特別講読……11
院生コーナー 南アフリカ＆レソト王国紀行 阿部なつ江……12–13
支部コーナー……13
関東支部：第10回地質汚染（土壌を含めた地層汚染・地下空気汚染・地下水汚染）技術研修会のお知らせ（第2報再掲）
学会記事 1998年度第2回定例評議員会議事抄録……14–23
日本地質学会元会長有志の「学会運営についての要望書」と，藤田至則会員の「評議員会（秋山・斎藤両会員による）回答に対する批判と要望」と，その回答……24–25
追 悼 渡辺文平さんを悼む……26
カレンダー……27
The Island Arc……28
The Island Arcだより/1999年（Vol. 8）からのThe Island Arc新規購読希望者募集中！/新規講読申込・変更届け出用紙
会費の「口座引落」方式導入による「預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書」のご提出について（お願い）……30
「預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書」（巻末綴込）

表紙解説

ケニア・リフト北部，リフトフロアに見られる火山灰丘，溶岩とそれらを切る断層

東アフリカ大地溝帯，ケニア・リフト北部のBarrier地域はリフトグラーベンに位置するものの，北側のTurkana湖と南側のSuguta Valley（Trough）を境する地形的高まりで，ちょうどBarrierのようになっていることからChampion（1937）によって名づけられた．この地域には中期更新世から完新世に至る若い火山岩類が東西，南北約23 kmの範囲に分布している．特にTeleki火山とAndrew火山は数百年前まで噴火しており，前者では1895年に溶岩の噴出が確認されている（Dodson，1963，Ochieng et al., 1988）．溶岩の他に大変美しい多数の火山灰丘も見られる（Sawada，1995，諏訪，1997）．

溶岩は玄武岩，ベイサナイト，トラカイトからなり，火山灰丘は火山灰の他，スコリア，軽石あるいは溶岩の破片を伴う．またこの地域の中央部にはトラカイト溶岩と軽石の噴出を伴う直径4 kmのNagaramasainiaカルデラがある．

写真はMurniauの火山灰丘で，少なくとも4つの南北性断層によって切られており，周囲にもリフトグラーベンに平行する多数の断層が見られる．火山灰丘の中央部から黒色の溶岩が流出している．

この写真は「東京倶楽部研究助成金：北部ケニア・エチオピア及びアラビア半島南端部の砂漠化と地質プロジェクト（諏訪兼位代表，星野光雄，沢田順弘，ナイロビ大学，エチオピア地質調査所，イエメン石油・鉱物資源省）」の現地調査の際にセスナ機（機長：A. Simpson）から撮影されたのもである．

（写真・解説：島根大学総合理工学部 沢田順弘）

松本大会プログラム変更 ［8月号News誌に掲載のプログラムを下記のように変更いたします］

「情報地質」のポスター発表日は26日（土）です．（変更前：27日（日））

「火山地質と火山発達史」の発表時間は14：00-16：00（変更前：14：30–16：30）

「火山噴火と噴出物」，「火山地質と火山発達史」，「火山活動とテクトニクス」の口頭紹介時間（合同）は12：00-12：20です．（変更前：14：10-14：30）

＊講演題目・発表者が講演要旨と相違する場合は，講演要旨を採用するものします． ―日本地質学会行事委員会―

表紙デザイン：渡部芳夫 レイアウト：村松雅子

学協会・研究会報告

国際オフィオライト会議98（オウル大学・フィンランド地質調査所共催）報告

International Ophiolite Symposium, 10-15 Aug. 1998, Oulu, Finland

「地質時代を通じてのオフィオライトの形成と定置」をテーマとして，1998年8月10日～15日に，地元フィンランドをはじめ露・伊・仏・日・米・ポルトガル・エジプトなど，世界20か国から約70人の参加者を集めて開催された．

10–12日の講演会（於オウル大学）で，米国のMooresは，10億年前より古い時代の数少ないオフィオライトは，どれも地殻部分が非常に厚いので，原生代中期以前の地球の海洋地殻は大陸地殻に匹敵するほど厚かったとする，彼の1986年以来の持説を主張した．会議後に巡検する20億年前のJormuaオフィオライトの海洋地殻部分は非常に薄く，顕生代のものと同様であるとの質問がでたが，それは例外だと答えた．カナダのScottは，同じく20億年前の（Purtuniq）オフィオライトについて報告した．このオフィオライトは確かに地殻部分が厚いが，それは海嶺玄武岩組成の海洋地殻の上に海洋島玄武岩組成の火山体が載っているためで，これは原生代前期の海山の断片であり，原生代の海洋地殻が普遍的に厚かったとするMooresの説を支持するものではないと述べた．

また，オフィオライト海嶺起源説をとる人にとって，オフィオライトの火山岩が島弧火山岩と同様の化学組成をもつことが悩みの種だったが，米国のElthonは，大西洋のSite 334や太平洋のチリ海嶺の一部では島弧マグマの性質を示す火成岩が海嶺から得られており，海嶺でもそのようなマグマが発生し得ることを指摘した．彼はまた，チリのタイタオ・オフィオライトを世界で最も若い（数Ma）ものとして紹介した．フランスのNicolasは海嶺上で発生するマイクロプレートがオフィオライトの形成と定置にとって重要だとする新しいモデルを提案した．これはキプロスやオマーンに見られる岩体全体の大きな回転を説明するのに都合がよい．ロシアのEfimovはウラル山脈極北部のオフィオライトに含まれるグラニュライト相変成岩は，オフィオライトが定置する前のドライな環境での沈み込みによって形成されたと解釈した．南アフリカのde Witは，34.8億年前という世界最古のジェームスタウン・オフィオライトについて，地殻部分の厚さは5 kmであること，わずか2千万年程度で海嶺的な環境から島弧的環境に変化したことを示し，顕生代オフィオライトとの形成過程の類似を指摘した．石渡は，ロシア極東地方タイガノス半島の「海洋底マントルに貫入する島弧オフィオライト」を報告した．中川は西太平洋地域のオフィオライトかんらん岩類の白金族元素組成に見られるルテニウム異常について報告した．

13日以後は巡検で，Kontinenがヨルムア・オフィオライトの，氷河で削られた多数の素晴らしい露頭を案内し，この20億年前のオフィオライトが顕生代のものと何ら変わりないことを参加者に納得させた．14日はその南東方の始生代Kuhmo緑色岩帯，15日はオウトクンプ・オフィオライト内の銅・コバルト鉱山跡を見学した．

従来，オフィオライトの研究は欧州～中近東の中生代のものを中心におこなわれてきたが，今回初めて，大陸楯状地の原生代前期のオフィオライトを，世界のオフィオライト研究者が一緒に巡検し，それが顕生代のものと全く同様であることを確認したことは意義深い．この会議の要旨集と巡検案内書は，既にGeological Survey of Finland Special Paper 26として出版されている．

（金沢大・理　石渡　明，
地調・北海道　中川　充）

オウル大学で開会のあいさつをする主催者側のE. Hanski氏（フィンランド地質調査所）/巡検の様子
20億年前に形成されたヨルムア・オフィオライトの層状岩脈群/ヨルムア・オフィオライトのT-MORB（T型海嶺玄武岩）質枕状溶岩

地学英語雑感⑦　良いセンテンスをつくる―5

嶋崎吉彦

前回はコンマついて述べた．今回は引き続いて，我々になじみの深いピリオドから始める．

b. **ピリオド**

ピリオドの使い方については，あまり問題はなく，ここで採り上げることもないように思えるが少々気の付いたことを述べる．センテンスの最後につけることは言うまでもないが，多少厄介なのが略字の後のピリオドであろう．略字については後で少し詳しく述べたいと思っているが，ここでは，ピリオドに関することだけを極めて簡単に触れておく．もちろん，数値の後にくる単位の略にはピリオドを付けない，5 cm，3 kg，10 Vなどである．また一般的には言葉を途中で略する場合には必ず付けるが，頭文字を並べた場合は付けるのが正式ではあっても付けなくても良いと思われる．例えば；Fig., Geol. Soc. Bull.ではあるが；U.S.A.→USAで良い．また“Suggestions”では方位を略するときは必ずピリオドを付けるよう特筆しているが，筆者にはこれはどちらでも良いように思える．例えば，北緯35°,東経130°はUSGS方式ではlat 25°N., long 130°E.,となり（何故latとlongにピリオドを付けないかは不明だが，恐らく数値を付けた単位の略として扱っているのであろう），また走行傾斜もN.65°E., 20°SE.,となるが，これは付けなくてN65°Eでも良いと思う．

c. **セミコロン**

セミコロンは我々に余りなじみの深いものではないが，便利な記号でもあると思うので，少し詳しく述べよう．一般にセミコロンはセンテンスの途中でコンマよりも強い切り目を示したいときに使う．

．コンマで切られている文をさらに分離する時に用いる．“Suggestions”の例を借りれば，“Much of the unit is red, pink, or gray; medium to coarse grained; and equigranular or slightly porphyritic.”

．二つの独立した節を接続詞を用いないで分けるときに使う．“Only tungsten and tin are sufficiently concentrated to be potential resources; other elements shown in figures 4–6 are possible pathfinder elements for exploring other prospects.”これは，それぞれの節が完全に一つの考えを展開しており，しかも互いに強く関連している．この場合resourcesのあとをコンマで切ると，前に述べた“run–on”センテンスとなり，これは，“mild illiteracy”ということになる．筆者はむしろここはピリオドで二つの文に分けることを奨めるが，関連の深い二つの節はセミコロンで切って一つのセンテンスとする方がUSGSでは良い文章としているようである．

．副詞的接続詞で二つの節をつなぐ場合には，その前にセミコロンを打つ．副詞的接続詞の通常用いられるものは；accordingly, moreover, besides, nevertheless, consequently, still, furthermore, therefore, hence, thus, however；等である．この例を“Suggestions”から引用すれば；“In-place rock was sampled whenever possible; however, most plugs were taken from cores or from boulders around quarries or construction-site borrow pits.”これが，however の副詞的接続詞の用法であって，前にセミコロン，後にコンマが必要であり，もしコンマを前に使うといわゆる“run–on”センテンスになってしまい，感心しない．ここで注意すべきは，次のようにhowever を副詞として使う場合である；“In–place rock was sampled whenever possible; most plugs, however, were taken.....”となり，前後をコンマで囲む．後者の方が二番目の節が重要なplugが先に位置しているので読みやすいと思う．さらに最も読みやすく，筆者が奨めたい書き方は，前者ほど洗練されていないかも知れないが；“In–place rock was sampled wherever (whenever) possible, but most plugs were taken.....”である．

．我々もよく使う，“for example”，“namely”，“that is”の前にはセミコロン，後にはコンマが必要である．そして，このような文構造は，センテンスの最後にもってくるのが最もスムーズである．“Suggestions”では，これを文の途中に入れざるを得ない時はダッシュかカッコで囲んだ方が良いという，英語に自信のある人は使って見られると良い．例；“Simple physical and mathematical modeling is useful in investigating the general characteristics of a broad class of geothermal systems; for example, vapor-dominated or hot–water systems.”

d. **コロン**

コロンを我々が最も良く使うのは，「...以下に述べる：」というようないわゆるintroductory statementの後に付ける場合であろう．例としては，“The following is a list of ..... :”とか　“..... are shown as follows :”などである．

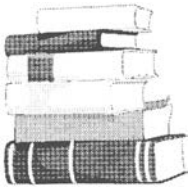
次回で，他のpunctuationをまとめて述べたいと思っている．

日本地質学会ニュース読者の皆さまへ

新しい日本地質学会*News*をご覧いただいた皆さまのご意見をお待ちしております．地質学会事務局またはニュース担当宛に，ニュース誌でお読みになりたい情報や記事などのご要望，掲載記事や企画へのご意見など，ファックス・電子メールでお送りください．また，ニュース誌の表紙を飾る地球科学的な写真のご投稿もお待ちしています．

なお，いただいたご意見はニュース誌に掲載させていただく場合がありますので，ファックスでご意見をいただいた場合には追ってフロッピー等で原稿をお送りいただければ幸いです．　（ニュース誌委員長　髙橋正樹）

日本地質学会編集事務局　Fax : 03–5256–5676　E–mail : geosocjp@ra2.so–net.or.jp



紹　介

とやまライブラリー5
富山のジオロジー
―富山の大地の成り立ちを探る―
相馬恒雄著

〔シーエー・ビー　1997年5月10日発行，B6判，225ページ，定価2,000円＋税〕

本書は，長年飛騨帯を研究してきた富山大学教育学部教授の相馬恒雄氏が3年をかけて書き上げた本で，1997年5月に刊行されたものである．

従来より地域地質に関する解説書は北陸・富山に関するものも含め，数多く出版されてはいるが，それらのほとんどは現場へのアクセス・露頭の紹介と記載的事実の解説の域を出ていなかった．

本書の最大の特徴は，一貫してプレートテクトニクス・プルームテクトニクスの視点から，日本列島の形成・地史における変遷の中で富山の地質とその意味するところを説明しようと試みた点であろう．そういう点で，従来の地域地質の説明書とは一線を画している．

プレートテクトニクスからプリュームテクトニクスへの進展は，現東京工業大学教授の丸山茂徳氏を中心とするグループなどが発展させた研究で，著者は丸山氏の研究の初期段階から富山大学において同じ研究室でともに研究をしており，その解説には息の合った呼吸が感じられる．長年にわたる著者と著者の勤務する富山大学教育学部卒論生達が蓄積した膨大なフィールドデータと，他の研究者の成果も含めて，地球規模の運動が富山の大地にどのように記録されているのか，「富山の大地の全体像」構築のために汗を流した努力が伺える．

例えば，中圧型の宇奈月十字石片岩や高圧型の姫川のヒスイがなぜ・どのような地殻の変遷の中で形成されたのか？日本海の拡大と第三紀火成活動はどのようにして起こったのか？　立山連峰はなぜ高いのか？　それらの証拠が富山の大地の何処にどんな形で残されているのか？　豊富な資料をバックグラウンドに，著者独自の解釈を随所に盛り込み，統一的にプレートテクトニクス・プルームテクトニクスの観点からの説明を試みている．新しい事実が出現するによって，ひとつ一つの現象の解釈などについては将来変更すべき点が出てくる可能性はあっても，あえて現時点において古生物学者でなく岩石学者がまとめた「富山のジオロジー」は，読み応えがある．

全6章は，
第1章：富山の台地の成り立ちを岩石から読むために，
第2章：立山連峰はなぜ高いか，
第3章：日本海はどうしてできたか，
第4章：富山は日本の生みの親，
第5章：富山の大地の誕生，
第6章：花崗岩からなる富山
の構成より成る．

著者とともに飛騨変成帯の研究をしている現富山大学助教授の椚座圭太郎氏等による飛騨変成岩（輝石片麻岩）の形成を物質移動（機械的混合）の考えを取り入れて説明した研究成果の紹介が本書に色を添えている．

著者が「あとがき」でも述べているが，本書は博物館の学芸員や小・中学校・高等学校の先生方に読んでいただき，露頭に立った時「なぜそこにそのような岩石や石があるのか？」理解し，解説する際の参考にしていただきたいと思う．

著者自身「専門用語はなるべく使わないように」心がけておられるが，それでも内容的にとっつきにくく，我々が読んでもややむずかしく感ずるところがある．本書の理解を助ける意味からも，この本をテキストにして講演会や巡検などを企画する試みが待たれるところである．

ところで，現在このような新しい考え方による地域地質の解説書は，ほとんどないといってもよいのではないだろうか？

プレートテクトニクスの観点は，多くの研究者によって受け入れられ，異論はあるものの多くの市民にも知られるようになった．そのような状態でありながら，大部分の地域地質の解説書が依然として平面的な解説と記載的な事実の紹介に止まっているいることは何としたことであろうか？

この本が起爆剤となって，富山以外でも独自の地球観・日本列島の形成・地史観に基づいた郷土の地域地質説明書がさらに刊行されることを願っている．

（赤羽久忠）

写真でみる火山の自然史
町田　洋・白尾元理著

〔東京大学出版会　1998年3月20日発行，B5判，204ページ，定価4,500＋税〕

ふだんは静かに美しくそびえている火山も，時としてダイナミックで激しい噴火活動を行い，広い範囲の自然環境に影響をあたえる．日本は，世界の陸地面積のおよそ0.25％しか占めていないにもかかわらず，世界の火山の約8％が集中している火山国である．このように火山が密に分布しているため，火山は日本の自然史の本質的要素ということができる．

多彩な内容

この本は火山国の自然史を語るために，日本を中心に11地域をえらび，火山の成り立ちや火山に関連する現象が書かれている．この本の目次を紹介すると…

1. 富士・箱根火山―関東ロームのふるさと
2. 伊豆大島―玄武岩質火山のリズミカルな活動史
3. 伊豆半島―単成火山群と浅海底火山堆積物
4. 浅間山―噴火を繰り返す安山岩質火山
5. 十和田カルデラと八甲田カルデラ―マグマ水蒸気噴火の産物
6. 北海道南西部の諸火山―多様な火山地形と北日本の広域テフラの給源
7. 九州のカルデラ―巨大噴火とその影響
8. 白頭山―北日本から解明された10世紀の大噴火
9. ニュージーランド・タウポ火山帯―巨大噴火の巣
10. ハワイ―噴火を続けるホットスポット
11. アイスランド―火と氷の島

（1，5，6，7，8，9章を町田氏が担当，2，3，4，11章を白尾氏が担当）

と，実に多彩である．単成火山群が登場するかと思えば成層火山やカルデラ火山もでてくる．また，カーボナタイト以外のマグマはすべてカバーされているし，火山テクトニクスの観点からは島弧の火山からホットスポッ

ト・中央海嶺上の火山にまで言及されている．マグマ噴火もあればマグマ水蒸気噴火も登場する…　およそ考えられるほとんどのタイプの陸上の火山や噴火について語られている．また，構成は各章独立のオムニバス方式なので，気ままに好きな章から読みはじめれば，いつのまにか火山に関する広い知識が得られる構成になっている．

この本の著者の一人町田　洋氏は広域テフラのパイオニアとして高名で，すでに『火山灰は語る　火山と平野の自然史』などの名著をお持ちの方である．また，それだけではなく町田氏は，火山学と他の分野の学問―特に考古学，気候学，地形学―との境界領域の研究分野の開拓者でもある．そのような事情を反映して，この本は，火山をめぐる自然史のほかにテクトニクスと火山との関係，火山による気候変動，さらには歴史との関りにまで筆がおよんでいる．

火山学は「オブジェクト指向」の学問で，火山を対象にするという限定だけはあるもののその方法はさまざまである．特に最近は，火山地質学や火山岩岩石学といった古典的な分野の枠からはみ出すような研究が多い．このような，現代の火山学の多面的な発展過程を知るためにこの本は有効であろう．また，このような多彩さはこの本の楽しさの源でもある．

魅力的な写真

また，著者の一人の白尾元理氏は，サイエンスライターとして，また，火山と天体の写真家として活躍されている．この本をめくると白尾氏のこだわりのある魅力的な写真が随所に使われていることがわかる．

普通，どのような火山でも実際に行って見るまではいわゆる「土地勘」が浮かばず，どのような火山か実感として理解することはむずかしい．ところが，この本を読むとその火山をすでに訪れたかのような不思議な感覚が得られる．どうやら，それはこの本に多用されているセスナからの空撮写真の効果らしい．空撮写真で全体像をつかんでから各露頭の写真や解説を見ると，その火山の状況が三次元的に理解できる．これは他の巡検書や露頭写真集には見られない特徴といえよう．

また，全写真がカラーであることもこの本の特徴である．カラーの露頭写真により，モノクロ印刷では識別できないような，露頭の微妙な色合いまで良く表現されている．また，これだけカラー写真を多用した厚みのある本であるにもかかわらず定価が安いことも魅力的である．

以上のようにこの本は読みやすく理解しやすいので，楽しみながら火山の知識を身につけたい人々にとって絶好の本といえよう．ぜひ，一読をおすすめしたい．

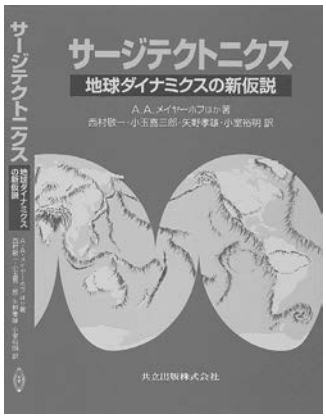
一般教育に使用可能

これまで，さまざまな火山に関する本が出版されてきた．しかし，文系の大学生を対象にした一般教育で使える適当な本はなかなかなかった．その点，この本は，地学の初心者にも取りつきやすいようにいろいろな工夫がなされている．カラー写真を豊富に使っているのはもちろんのこと各章の扉にはデジタルデータを加工したカラーの地形図がのせられている．しかも，各火山の説明は物語風で最小限の専門用語しか使わないように工夫され，巻末には丁寧な用語集がある．熱心な文系の学生であればこの本は充分理解可能と思われる．また，この本には火山の噴火が，歴史や文明に影響を与えてきた例が各所で取りあげられ（例えば10世紀の白頭山の噴火と渤海国滅亡との関係，アイスランドのラカギガル噴火と天明の飢饉との関係など），文系の学生にも訴えるものを持っていると思われる．このような点からみて，この本は一般教育の教科書あるいは副読本として使用することができるだろう．また，この本には，さまざまなテクトニクスや噴出環境に対応する露頭や火山地形の写真が掲載されているので，火山地質学の講義や地質巡検の参考書としてもちいれば，講義内容の理解を深めるために有効であろう．

（林　信太郎）

サージテクトニクス
地球ダイナミクスの新仮説

A. A. メイヤーホフほか（著）
西村敬一・小玉喜三郎・
矢野孝雄・小室裕明（訳）



〔共立出版株式会社，1998年7月発行，
B5判，174ページ，定価4,800円（本体）〕

この訳書は，下記の原著論文の全訳であり，A. A. Meyerhoffによる「日本語版への序文」と，19ページに及ぶ「さくいん」が付されている：Meyerhoff, A. A., Taner, I., Morris, A. E. L., Martin, B. D., Agocs, W. B., Meyerhoff, H. A., 1992, Surge tectonics : a new hypothesis of Earth dynamics, *in* S. Chatterjee and N. Hotton III (eds.), *New Concepts in Global Tectonics*, Texas Tech University Press, Lubbock, Texas, USA, p. 309–409.

A. A. Meyerhoff氏は，「日本語版への序文」の執筆（1994年6月）から3か月後に死去された．それから2年後に，数人の共著者を加えて上述の原著論文を増補した下記の単行本が刊行されている：Donna Meyerhoff Hull (ed.), 1996, *Surge Techonics : A New Hypothesis of Global Geodynamics*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, Solid Earth Sciences Library Vol. 9, 323p. この著書には，東南アジアの構造発達史と，地球上の台地玄武岩に関する論述が含まれている．

訳者らは，「サージテクトニクス」という新たな仮説に到達するまでの背景と過程を詳細に記述している原著論文（1992年）を紹介する必要があると考えて，その全訳の刊行を企図したという．

アメリカの石油地質学者A. A. Meyerhoffは，その父H. A. Meyerhoffとともに，大陸移動と海洋底拡大を認めず，プレートテクトニクス仮説を全面的に否定する立場に立って，1970年頃から頑強に論陣を張りつづけた．そして約20年を経て，共同研究者とともに提唱したのがサージテクトニクス仮説である．

訳書の第Ⅰ編（序論）は，「既存の地球ダイナミクス仮説では説明されていないデータ群」の概説である．その主なものとして，直線状構造，マントルのダイアピル作用，渦巻構造，分節構造，リフト帯と吸い込み帯，高熱流量帯，微小地震帯などが挙げられ，とくに，構造帯の東方への移動に注目している．

訳書の第Ⅱ編（サージテクトニクス論）の構成はかなり複雑であり，1～30章に分けて記述されているが，論旨の展開のしかたは必ずしも明快ではない．まず冒頭で地球収縮説の論拠とベニオフ帯について述べたあと，「地球上のすべての構造帯は流動するサージチャネルに起因する」という概念（着想）を提示し，基幹チャネル，フィーダーチャネル，分岐チャネル，決壊チャネルなどに分類する試論が示される．次いで，海洋・大陸縁・大陸内の代表的な構造帯（海嶺・山脈・リフト・地溝・走向移動断層帯など）について，主に1980年代にえられたデータにもとづいて，サージテクトニクスの観点からの論考が展開される．第Ⅱ編の後段（15～29章）では，反射法地震探査によるサージチャネルの映像，渦巻構造などついて紹介したあと，収縮と地向斜の造構サイクル，テクトニック・メランジュの起源，中央海嶺と大陸のリフト系の造構サイクル，花こう岩の起源，などの諸問題にも手短かに言及している．

サージテクトニクス仮説は，未だ十分には体系化されておらず，理解しにくい点も少くない．その核心は，1）地球の冷却・収縮，2）流体～半流体状のマグマの，リソスフェア内の水平流動（サージチャネル），3）地球の自転に起因するサージチャネルとアセノスフェアの東方への移動，であるように思われる．これが地球ダイナミクスの新仮説として，どのような展開の道筋を辿るかは予測しがたい．

プレートテクトニクス仮説の提唱から既に30年を経て，これが圧倒的多数の支持を獲得するに至り，今や揺るぎない定説（あるいは真理）となったと考える人も少なくない．しかし一方では，プルーム・テクトニクスや地球膨脹説など，“ポスト・プレートテクトニクス”の新仮説が胎動する萌しも見られ，真の地球ダイナミクスの構築はこれからの課題であると考えられる．その意味では，サージテクトニクスが提示した視点と素材を，批判的に吟味して取捨することは有意義であろう．

（紬野義夫）

1997年1月ナホトカ号重油流出事故による新潟県下の重油漂着状況と環境汚染
―調査研究報告書―

新潟大学重油流出による海の汚染調査グループ
（1998年3月）

あのいまわしい「ナホトカ号」重油流出事故（1997年1月上旬）から1年8か月が過ぎ，マスコミにも人々の口にもその話題はのぼらなくなってきている今日，ほとんどの人々は，もうすっかり重油が除去され，きれいな海が戻ってきていると思っている．ところが，人の手が入らない海岸には，未だに真っ黒なC重油がそのままの形で残っている．砂浜には大小さまざまなオイルボールが所々に見られるし，掘ってみると生々しい重油が顔を出してくる．ボランティアの手を借りてヒシャクとバケツで回収しきれなかった重油は，まだあちこちの海岸に残っている．“今年は赤潮が早いし，規模も大きい”“今年はワカメが取れない”など地元の人々の悩みも続いている．“ムラサキ貝にベンゾ(a)ピレンが濃集されている”という行政の報告も出ており，汚染の追跡調査の重要性が指摘されている．

新潟大学理学部自然環境科学科を中心にした重油流出による海の汚染調査グループは約1年間，県下の重油漂着状況と環境汚染を調査した．その重油汚染の追跡調査をまとめたのがこの報告書である．新潟県下の海岸における重油の漂着量は，石川県の能登半島と比較すると非常に少ないが，長い海岸線を持つ新潟県は，汚染された海浜の調査だけでも大変な仕事量であろう．今回の重油流出事故では，新潟大学の学生，研究者のみならず，小・中・高校の教師や住民の手で，オイルボールの分析，量，状況が調べられている．また，その調査結果をそのつど「調査ニュース」としてまとめ，1998年6月までにNo.15号を公表している．それによれば，1998年6月現在も海岸の玉石や磯の間には層状の重油が付着し，油臭もきつく，下を掘ると埋積した重油はそのまま残っているという．

報告書の“はじめに”の中には下記の文があり，印象的である．

“自然環境科学科からは多数の学生が参加した．重油流出による環境汚染についてはいくつかの報告が出されているが，教員を含め手がけるのは初めての人ばかりで，見通しがはっきりしている問題ではない．言わば，解答が存在しない問題に挑戦するようなものであった．現代の学生は，解答のある問題には意欲的であるが，予想されない未知の問題に対しては腰が引ける傾向があると言われている．しかし，自然環境科学科の学生達は，「何かをしなければ」という気持ちで非常に積極的に参加したものである．与えられたものを要領よく処理することよりも現実の問題に立ち向かうことは知的行動(大学教育)の原点であり，自分で行動し考えることによって面白さを感じ，何かをつかんだとすれば，その価値は極めて大きいと考えられる”．この点については，新潟大のみならず金沢大学の場合もまったく同様であった．

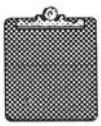
さらに，重油を分解する土着の細菌の実態についての報告もあり，目に見えない所で分解が進み，生態系を壊さない環境復元が望まれている．アメリカのバイオメーカーが分解細菌を日本に輸出しつつある今日，早急に考えなければならない問題である．アラスカの重油事故から8年が経過しているが，アメリカは未だに追跡調査を行っており，海草などの試料を採集して記録している．人のほとんど住んでいないアラスカでは，重油の回収もままならず，未だに真っ黒な重油が漂着したままの入り江も多く残されており，アラスカの例は「ナホトカ号」の8年後を見ていると考えてよい．この報告書は下記に連絡すると無料で入手できる（残部40部　送料はご負担下さい）．

〒950-2181 新潟市五十嵐2-8050
新潟大学理学部自然環境科学科内
卯田　強（電話 025-262-6141，E-mail : uda@woody.ge.niigata-u.ac.jp）
久保田喜裕（電話 025-262-7534，E-mail : kubota@geb.ge.niigata-u.ac.jp）

（金沢大学　田崎和江）

寄贈本・紹介依頼本

- 「人と自然」8　兵庫県立人と自然の博物館
  （加藤茂弘：兵庫県千種川の，河床勾配の縦断変化から区分された流路区間における流路の平面形状と河床堆積物の粒径分布
  小林文夫：兵庫県の先白亜系基盤岩とその地質大構造
  佐藤裕司・鴨本　格・ング　チンケン・松浦　康・前田保夫：兵庫県における中部更新統・高塚山層（神戸市垂水区）の堆積環境解析
- 「環境よもやま話―金沢大学からの発信」　金沢大学理学部地球学科地球環境科学科 1998.08.01
- 「日本列島の地形と地質環境―豊かで安全な国土のマネジメントのために―」財団法人全国地質調査業協会連合会



ご案内

公開シンポジウム「日産財団　知の協演シンポジウム」「―水惑星地球の未来Ⅰ―」

日　時：1998年11月10日（火）14：00～17：30
会　場：東京神田学士会館（開場　13：30）

プログラム
海洋生物絶滅の危機と保全
北海道大教授　向井　宏
気候変動と生態系変化
東京大教授　大森博雄
アジア諸国における財政と環境
法政大教授　金子　勝
森と文明
日本国際文化研究センター教授　安田喜憲

申し込み締め切り：10月30日（金）
申し込み：住所，氏名，年齢，職業，電話番号を記入の上，Fax，はがき，または E-mailで下記へ（先着100名，入場無料）

財団法人日産科学振興財団
〒104 東京都中央区銀座6-17-2
電話 03-3543-5597　Fax 03-3543-5598
E-mail : at02-nsj@t3.rim.or.jp

「都市地震防災地盤図」に関するシンポジウム

主　催：日本応用地質学会

兵庫県南部地震の経験を経て，全国の都市で今後必要とされる地震対策の一環として深部地質の情報を盛り込んだ地盤図の作成が有効と考えられます．しかし，深部地盤構造が

地表地震に及ぼす影響の程度については，これまで十分に解明されていたわけではありません．本シンポジウムでは，兵庫県南部地震時の神戸市域を事例として，深部地盤構造の把握，地盤構造のモデル化，動的応答解析という一連の解析作業の流れにおいての最新の研究成果を公表し，「都市地震防災地盤図」のベースとなるべき深部地盤構造の重要性を明らかにすることを目的としています．

日　時：平成10年11月30日（月）10：30～17：00

会　場：中央大学駿河台記念館281号
東京都千代田区駿河台3–11–5
電話 03–3292–3111

タイトル：「都市地震防災地盤図」に関するシンポジウム―深部地盤構造の重要性―

プログラム

特別講演（仮題）“震災の帯”と地下構造調査　入倉孝次郎（京都大学防災研究所）

シンポジウム（神戸地域の事例研究）

司会：田中芳則（地震防災技術委員会委員長東洋大学）

1.　深部地盤構造の重要性　中川康一（大阪市立大学）
2.　神戸市域の地形・地質と被害の概要　佐野正人（サンコーコンサルタント(株)）
3.　地盤のモデル化
　(1) 深層地盤のモデル化　横田　裕（(株)阪神コンサルタント）
　(2) 表層地盤のモデル化　緒方信一（中央開発(株)）
4.　解析の方法，結果，考察
　(1) 深層地盤の応答解析　東　貞成（(財)電力中央研究所）
　(2) 表層地盤の応答解析　森田悠紀雄（基礎地盤コンサルタンツ(株)）
　(3) 表層地盤の動的応答と地震被害　石川浩次（中央開発(株)）
5.　「都市地震防災地盤図」の作成に向けて　中尾健児（川崎地質(株)）

.

教科「理科」関連学会協議会　第3回シンポジウム「これからの理科教育に求めるもの」

教科「理科」関連学会協議会は，第3回シンポジウム「これからの理科教育に求めるもの」を下記の要領で，本年12月12日（土）に日本化学会（東京都千代田区）にて開催いたします．

6月には教育課程審議会の「審議のまとめ」が出され，新しい教育課程の方向性が示されました．これを受けて本年度中には，学習指導要領が出ます．学校五日制や特色ある学校作りが時代の要請とされ，時間数や内容削減などでは理科教育にも従来にない大きい変更が求められているといえましょう．しかしながら，ますます発展し，我々の生活と関わりを深めつつある科学・技術の発展の基礎として理科・科学のこれからの社会における役割は大きくなっており，この変更への対応はきわめて重要です．

これからの理科教育に求めるものは何かを，教育行政・産業界・マスコミ界・他の研究領域の学会から出席していただき，忌憚無いコメントを頂戴する中から，参加された方々とも検討し，よりよい進め方や実践方法等を考えていきたいと存じます．

皆さまのご参加と，ご討議をお願いいたします．

期　日：1998（平成10）年12月12日（第2土曜）

会　場：日本化学会（東京都千代田区神田駿河台・JRお茶の水下車）

プログラム

開会行事・趣旨説明　13：00～13：30

あいさつ

佐野博敏（協議会議長・日本化学会・大妻女子大学・大学セミナーハウス）

趣旨説明

松原静郎（日本科学教育学会・国立教育研究所）

新田正博（日本理科教育学会・新宿区立四谷第1中学）

講　演　13：30～16：00：途中休憩があります

1　江田　稔氏（文部省・視学官）
2　小野田武氏（三菱化学株式会社・専務取締役）
3　横山裕道氏（毎日新聞社・論説委員）
4　浪川幸彦氏（数学会・理事長）

司　会　間々田和彦（日本地学教育学会・筑波大学附属盲）

総合討論　16：00～17：00

司　会　伊藤　卓（日本化学会・横浜国立大学）
増子　寛（日本物理教育学会・麻布高校）

閉会行事

あいさつ　竹内一男（日本生物教育学会・玉川大学）

なお，講演者は都合により変更になることがあります．また資料代として当日500円の参加費を申し受けます．

お問い合わせは：協議会書記　間々田和彦（筑波大学附属盲学校）まで
〒112–8684 東京都文京区目白台3–27–6
筑波大学附属盲学校内
電話 03–3943–5421，Fax 03–3943–5410

「アジアにおける陸と海のリンク」物質輸送と地層形成に関する国際ワークショップのお知らせ

現在の地球表層において，地球環境や物質循環に大きな影響を及ぼしているアジア―オセアニア地域を対象とした国際ワークショップが，1999年3月16–19日につくば市の研究交流センターで，地質調査所と科学技術国際交流センターによって開催されます．これらの地域は，ヒマラヤやチベットから流下するインダス川，ガンジス・グラマプトラ川，メコン川，長江，黄河などを通じて，また熱帯雨林の高い山地を有する島嶼の小河川を通じて，世界全体の約7-8割とも推定される堆積物が海域に供給されています．また世界の人口の半分以上が居住している地域でもあり，河川や沿岸域への人為的影響が地球規模で懸念されている場所でもあります．

ワークショップでは，西太平洋に多く分布する縁海の役割（特に生物地球科学的側面），河川から深海への物質輸送と人為的影響，地層/シーケンス形成と第四紀の環境変動に焦点をあてて行われます．

会　場：研究協力センター（つくば市竹園2–20–5，電話 0298–51–1331）

日　程：1999年3月15日登録，3月16–18日ワークショップ，3月19日地質巡検

発表形態・内容：発表は，基調講演を中心に行われる予定で，一般発表は口頭紹介付ポスターで行われます．現在予定されている基調講演・招待講演者，主な海外からの参加者は以下のとおりです．

縁海の役割と重要性：角皆静男（北大），高橋孝三（九大）

黄河，長江，東シナ海の物質輸送：井関和夫（中央水研），HU Dunxin（中国），YANG Zuosheng（中国），SHEN Huangting（中国）

東シナ海の地層形成：LIU Zhanxia（中国），ZHAO Quanhong（中国）

メコンデルタの地層形成：Nguyen Lap Van（ベトナム）

タイ沿岸・スンダ陸棚の地層形成：Sin Sinsakul（タイ），Thanawat Jarupongsakul（タイ），How Kin Wong（独国）

ニューギニア島の物質輸送：Gregg J. Brunskill（オーストラリア）

ガンジス・グラマプトラデルタ・ベンガルファンの物質輸送と地層形成：V. Subramanian（インド），Steve Kuehl（米国），Herman Kudrass（独国）

インダスデルタ・アラビア海の物質輸送：George Postma（オランダ），Venugopalan Ittekkot（独国）

日本周辺の物質輸送と地層形成：平　朝彦（東大）

アジアの物質輸送：John D. Milliman（米国）

太平洋周辺の物質輸送と地層形成：Mike Field（米国），Chuck Nittrouer（米国）

ヨーロッパ周辺の物質輸送と地層形成：Serge Berne（仏国），Serge Heussner（仏国）

地質巡検：3月19日に，日帰りの地質巡検「関東平野上部更新統の浅海相とシーケンス（仮題）」を行います．案内者，伊藤慎（千葉大学）．参加費は2,000円です．定員は40名で，海外からの参加者，発表者を優先し，先着順となります．

一般発表の受付：物質輸送や地層形成に関し

て，水路実験，現在の海洋での調査研究，陸上の地層の研究など，幅広く受け付けます．発表希望の方は，11月20日までに英文要旨を250語以内で，事務局まで電子メールでお送りください（タイトル，著者，所属，本文）．要旨受理の連絡は12月に行います．1月15日が拡大要旨（カメラレデー，4–8ページ）の締め切りとなっています．拡大要旨はワークショップ当日参加者に配付されます．またプロシーディングを国際誌の特集号から発刊する予定です．

登　録：参加希望の方は，11月20日までに，氏名，所属，連絡先住所（以上英文と和文），電子メールアドレス，Tel & Fax番号，発表の有無，巡検参加の有無を，できるだけ電子メールで事務局まで送付してください．登録して頂いた方には，セカンドサーキュラーを発送し，参加費は無料の予定です．会場，予算との関係から登録参加者は，発表者，海外からの参加者を優先し，100名までとさせて頂きます．

ワークショップ正式名称：
「沿岸・外洋遷移域における物質輸送と貯留に関する国際ワークショップ」

エメリー教授追悼：このワークショップの企画後，1998年4月12日に元ウッズホール海洋研究所のKenneth O. Emery教授が亡くなられました．Emery教授は東アジアから東南アジアにかけての陸棚域において，堆積物や海水準変動に関する先駆的な研究を行っています．彼のアジア地域への多大な貢献に敬意を表し，今回のワークショップには彼と長年仕事を同じくしてきたJohn D. Milliman（VIMS）と相談の結果，Emery教授追悼国際ワークショップ「アジアにおける陸と海のリンク」の副題が付けられています．

本ワークショップへの問い合わせおよび要旨・登録の送付先：国際ワークショップ事務局
地質調査所海洋地質部　斎藤文紀　電子メール　yoshi@gsj.go.jp
（305–8567　つくば市東1–1–3．電話0298–54–3772，Fax 0298–54–3533）

注1：できるだけ電子メールをお使い下さい．送付の際，件名（Subject）を「Emery WS（要旨・登録）または（問い合わせ）」として下さい．

注2：斎藤に連絡がつかない場合は，同海洋地質部池原　研までお問い合わせ下さい．電子メール　<G0631@gsj.go.jp>

金沢大学創立50周年記念国際シンポジウム「地球–水–人間」

金沢大学は来年5月に創立50周年を迎えます．その記念事業の一環として，標記国際シンポジウムを企画いたしました．是非ご参加下さい．

5月30日（日）午後　国際市民シンポジウム「北陸の水辺」　W. S.ファイフ名誉教授の講演「水の循環」自然環境ポスター展，利き水会など

5月31日（月）　国際学術シンポジウム「地球–水–人間」外国招待者4名*による基調講演　パネルディスカッション　ポスターセッション

6月1日（火）午前　国際学術交流会議「今後の研究交流のあり方を考える」

* W. S. Fyfe（カナダ　ウエスタン　オンタリオ大学名誉教授　地球科学・地球環境科学専攻）
金　周栄（中国　社会科学院数量経済研究所教授　環境計測専攻）
G. Y. Dimitrieva（ロシア　極東大学準教授　微生物専攻）
J. N. Abramovitz（アメリカ　ワールド・ウオッチ研究所上級研究員　生態学　環境管理専攻）

参加者募集：出典・参加希望者は事務局までご連絡下さい．締め切りは1998年11月30日

5月30日（日）　自然環境ポスター展
国際市民シンポジウムと並行して，水環境を中心に自然環境問題を考えるポスター展を開催します．小中学生をはじめ，誰でも出典できます．

5月31日（月）　国際学術シンポ　ポスターセッション
A. 水の科学　水とバイオマット　河北潟の水質問題　深海の熱水
B. 水と生態系　諫早干潟の生態系　水辺の植物　石川の水鳥
C. 水と人間社会　潟の暮らし　金沢の都市用水　石川の水と地酒

問い合わせ先：実行委員会事務局　金沢大学理学部地球学教室　田崎和江
〒920–1192　金沢市角間町
電話＆Fax　076–264–5722
E-mail : symp50@kenroku.kanazawa-u.ac.jp
Homepage : http://symp50.s.kanazawa-u.ac.jp

資料：第24回海洋地名打合会で決定された海底地形名

海底地形名を決定する「海洋地名打合会」の第24回会合が平成9年11月25日に海上保安庁水路部において下記の出席者のもとに開催された．

（関係機関）
工業技術院地質調査所　湯浅真人，気象庁海洋気象部　石川孝一，東京大学海洋研究所　徳山英一，海洋科学技術センター　藤岡換太郎，日本学術会議地理学研究連絡委員会　樋根　勇，日本地質学会　水野篤行，日本地理学会　隈元　崇

（海上保安庁水路部）
沿岸調査課長　西田英男，海図編集室長　菊池眞一，海洋研究室主任研究官　岩渕　洋，海洋研究室主任研究官　加藤幸弘，海洋調査課主任海洋調査官　大森哲雄，沿岸調査課主任沿岸調査官　塚本　徹，沿岸調査課主任沿岸調査官　西川　公，水路通報課上席水路通報官　藤井孝男，海洋情報課主任海洋情報官　常政　稔

（事務局：沿岸調査課海図編集室）
主任海図編集官　今井健三，海図編集官　中尾　順，海図編集官付　塚本真由美

今回の会議では，工業技術院地質調査所及び海上保安庁水路部から提出された海底地形名の提案書により，8件の海底地形名が審議された．そのうち，海山2，海脚1及びカルデラ1の計4件の海底地形名が決定され，4件の海底地形名は，今回は保留することとなった．本年6月26日付けで送付された正式の報告書に基づいて，「第24回海洋地名打合せ会」の審議結果を紹介する．詳細については海洋地名打合せ会事務局（海上保安庁水路部沿岸調査課）に照会していただきたい．

海底地形名の審議結果

〔イ〕　小笠原海台東端部
平成4，5年の測量船「拓洋」による測量．測量方法は，シービームを使用し，測深線間隔は，5～6マイル．

（1）つくし海山（つくし　かいざん）【保留】
小笠原海台東端部，24–45N，148–50E（概位）（以後経緯度で示した位置はすべて概位である），水深3,780 m，比高約1,700 mの海山．付近にある第20回打合せ会で決定した「春の七草海山群」にちなみ春の植物名からの命名が提案されたが，「春の七草海山群」の範囲，定義等に疑問が生じることから将来，同海山群の南側の地形が明らかになった時点で再検討を行うことで今回保留となった．

（2）わらび海山（わらび　かいざん）【保留】
小笠原海台東端部，24–22N，148–57E（概位），水深4,430 m，比高約1,200 mの海山．付近にある第20回打合せ会で決定した「春の七草海山群」にちなみ春の植物名からの命名が提案されたが，「春の七草海山群」の範囲，定義等に疑問が生じることから将来，同海山群の南側の地形が明らかになった時点で再検討を行うことで今回保留とした．

〔ロ〕　小笠原海台北東方
平成3，4年の測量船「拓洋」による測量．測量方法は，シービームを使用し，測深線間隔は，5～6マイル．

（3）きく海山（きく　かいざん）
小笠原海台の北東方，27–50N，145–42E（概位），水深913 m，比高約4,000 mの海山．この名称は，東方の「秋の七草海山群」にちなみ秋の代表花から採用して，決定した．なお，別名としてネルソン海山とする．

〔ハ〕　小笠原海台東部
平成3年の測量船「拓洋」による測量．測量方法は，シービームを使用し，測深線間隔は，5～6マイル．

（4）南半沢海山（みなみはんざわ　かいざん）【保留】
小笠原海台東部，25–09N，147–12E（概位），水深2,660 m，比高約1,800 mの海山．付近に

ある第14回打合せ会で決定した「半沢海山」（「半沢」は日本の地質学の発展に大きく寄与した半沢正四郎氏の人名から採用）の南方にあるので，この命名が提案されたが，当該地形について海山という属名に疑問があること及び再度同じ人名を使うことの再検討を含めて今回保留とした．

（5）矢部海山（やべ かいざん）

小笠原海台東部，26–08N，145–22E（概位），水深1,090 m，比高約2,500 mの海山．この名称は，日本の地質学の発展に大きく寄与した矢部長克氏の人名から採用して決定した．

〔ニ〕沖ノ鳥島北方

平成2，5，6年の測量船「拓洋」による測量．測量方法は，シービームを使用し，測深線間隔は，6マイル．

（6）半月海山（はんげつ かいざん）【保留】

沖ノ鳥島の北，22–23N，136–50E（概位），水深2,300 m，比高約2,000 mの海山．海山の形が半月状のため，この命名が提案されたが東側の峰も含めた全体の山容に対して命名することで今回保留とした．

〔ホ〕八丈島付近

平成8年の測量船「明洋」による測量．測量方法は，シービームを使用し，測深線間隔は，0.5マイル．

（7）大越海脚（おおごし かいきゃく）

八丈島付近，33–15N，139–43Eから33–09N，139–44Eにかけて南～北にのびる長さ約10 km，比高約200 mの海脚．この名称は地理的名称から採用して，決定された．

〔ヘ〕須美寿島付近

平成8年の測量船「拓洋」による測量．測量方法は，シービームを使用し，測深線間隔は，0.1～0.5マイル．

（8）須美寿カルデラ（すみす かるでら）

須美寿島付近，31–29.0N，140–02.5Eを中心とする外輪山の直径約10 km，凹地の直径約6 km，比高約600 mの火山性の凹地．既存の文献及び最近の音波探査調査結果により火山性凹地として確証が得られたのでカルデラと定義した．この名称は地理的名称から採用して，決定された．

なお，これまで懸案となっている海底地形名に対する人名付与については，採用基準案を作成し，今後採用していく方向で合意された．

（水野篤行）

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は締切日半月前までに，執行委員会までお申し込み下さい．

第1回大学婦人協会守田科学研究奨励賞受賞候補者募集要項

趣　旨：本賞は化学教育者故守田純子氏から女性科学研究者育成のためにと遺贈された資金を基にして，自然科学を専門とする女性科学者の研究を奨励し，科学の発展に貢献する人材を育成することを目的として新しく設けられたものです．

対　象：自然科学分野において，優れた研究成果をあげており，将来自然科学の発展に貢献することが期待される40才未満（応募締切日現在）の女性科学者を対象としています．

授賞件数：年2件以内

賞状および奨励金30万円を贈呈します．

提出書類：1．推薦状，2．略歴，3．研究業績リスト，主要な論文別刷，4．主な研究題目とその概要および今後の展望と抱負等（A4判1～2頁程度）

応募締切日：平成10年11月30日（月）（当日消印有効）

書類送付先および連絡先：

社団法人　大学婦人協会

〒160–0017　東京都新宿区左門町11番6の101　電話 03–3358–2882，Fax 03–3358–2889

公募

教官公募等の求人のニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

神戸大学　内海域機能教育研究センターの教官公募

神戸大学　内海域機能教育研究センターで教授1名が公募されています．

本センターは瀬戸内海をはじめとする閉鎖性海域の海洋生物・海洋環境に関する教育・研究を目的とする学内共同教育研究施設として，平成7年4月に理学部附属臨海実験所を改組し，設置されたもので，生命動態（生物系），環境科学（地球科学系）の二教育研究分野から構成されています．公募研究分野は海水中の懸濁物質（サスペンジョン）の動態（運搬・拡散・集積，海洋生物との相互作用など）の地球物理学・地球科学的解析です．提出書類は1）履歴書；2）業績リスト（査読のある学術雑誌に掲載された原著論文，著書，その他に分類して作成）；3）主要研究論文の別刷りまたはコピー（10編以内）；4）これまでの研究内容の概要と今後の研究・教育の抱負（2000字程度）；5）推薦書，または応募者に関する意見を求めることのできる方2名の氏名・連絡先；6）その他参考になる事項（学会賞などの受賞，研究費取得状況，学会等での活動，招待学術講演など）．応募締切は10月16日（金）で，着任時期は事務手続き終了後なるべく早い時期を希望しています．

選考の過程で応募者本人に直接面接により業績の説明などを求めることがあります．応募書類は封筒に教官応募書類と朱書して書留でお送りください．

応募書類送付および問い合わせ先：

〒656–24　兵庫県津名郡淡路町岩屋2746

神戸大学内海域機能教育研究センター

センター長　川井浩史

電話 0799–72–2374　Fax 0799–72–2950

E–mail : kawai@kobe-u.ac.jp

なお，本センターの概要におよび研究内容についてはW.W.W.ホームページ（http://www.kurcis.kobe-u.ac.jp/）もご参照ください．

【ニュース記事・補足】

日本地質学会News 8月号の「日本地質学会国際賞の英文名称の募集」記事（2–3頁）の文責は嶋本利彦（各賞問題検討委員会・委員長）でした．お詫びして補足させていただきます．

☆地質学論集　近刊案内

地質学論集第50号が7月下旬に刊行されましたので，ご案内いたします．価格は2,500円．送料は380円．（現金または郵便振替00140–8–28067）なお，構造地質研究会会員には，会誌として，無料配布されます．

地質学論集　第50号　1998年7月

―構造地質　特別号―　21世紀の構造地質学にむけて

（狩野謙一・高木秀雄・金川久一・木村克己・伊藤谷生・山路　敦・小坂和夫編，1998年7月発行，263ページ，会員頒価2,500円，送料380円）

本論集は，日本地質学会構造地質専門部会の発足をふまえ，日本における構造地質学の進展を目標に掲げる唯一の組織である構造地質研究会の発足から30周年を記念して開催された「構造地質研究会1996年冬の例会」でのシンポジウム「構造地質の各研究分野における最近の研究の進展過程および今後の問題点のレビュー」（構造地質研究会・日本地質学会共催）を基礎として編集されており，構造地質研究会の機関誌「構造地質特別号」としても位置づけられている．

構造地質専門部会の活動を始めるにあたり，構造地質学の各分野における現状をレビューしつつ問題点を整理し，21世紀に向けた今後の課題を検討し模索していく作業が行われてきた．本論集では，その作業の一貫として，すでに構造地質研究会で活動をスタートしていた各研究グループごとに論文を編集した．それらは「基礎構造地質」，「日本列島のテクトニクス」，「地殻探査および堆積盆テクトニクス」，「地震地質・ネオテクトニクス」，「地球および惑星テクトニクス」，「応用構造地質」の6グループである．

計20編の論文のほとんどはレビュー論文であり，幅広い構造地質学の各分野における最近の動向と今後の課題を理解する上で役立てていただければ幸いである．とくに若い研究者にとっては，構造地質学―テクトニクス分野の今後の研究に向けてのよい指針となるであろう．

目　次

はじめに　狩野謙一・高木秀雄・金川久一・木村克己・伊藤谷生・山路　敦・小坂和夫……i–ii

基礎構造地質

岩石における動的再結晶……清水以知子　1–12

Fractal structural geology……Hiroyuki Nagahama　13–19

Progress in the studies of texture development in quartzite: recent topics……Toru Takeshita, Osamu Nishikawa, Masahiko Tagami and Jun-ichi Ando　21–32

未固結堆積物の変形挙動……廣野哲朗・芦　寿一郎　33–46

岩石の摩擦と流動に対する熱水および化学反応の影響：主要未解決問題……金川久一　47–57

破砕―塑性遷移領域の断層岩類……高木秀雄　59–72

アナログ・モデル実験にみる沈み込み帯の構造：延性的なマントル・ウェッジの流動から脆性的な上部地殻の変形まで……安間　了　73–88

日本列島のテクトニクス

日本列島の起源と付加型造山帯の成長　―リフト帯での誕生から都城型造山運動へ―……磯﨑行雄　89–106

付加体の構造地質学　―四万十帯を中心とした研究の現状と課題―……狩野謙一　107–130

付加体のout–of–sequence thrust……木村克己　131–146

四万十帯のデュープレックスと低角ナップ構造……村田明広　147–158

古生代～中生代の“アジア大陸”と“日本列島”……大藤　茂・佐々木みぎわ　159–176

地殻探査および堆積盆テクトニクス

反射法地震探査の発展と構造地質学の新たな展望……伊藤谷生・佐藤比呂志・井川　猛　177–192

反射法地震探査と衝突型造山帯テクトニクス……在田一則　193–204

地震地質・ネオテクトニクス

地震予知研究における構造地質学の役割……嶋本利彦　205–212

地球および惑星テクトニクス

月の起源・進化・テクトニクス……山路　敦・佐々木晶・山口　靖・小野高幸・春山純一・岡田達明　213–226

火星のテクトニクス……小松吾郎　227–234

応用構造地質

地質構造を捉える多様な視点と相互インターフェイスの必要性　―応用地質学が期待する21世紀の構造地質学―……横田修一郎　235–240

岩盤クリープと崩壊―構造地質学から災害地質学へ―……千木良雅弘　241–250

水みちとしての断層と節理―構造地質学から応用構造地質学へ……小坂和夫　251–263

地質学論集の割引について

地質学論集の割引については以下のとおりです，大いにご利用下さい．

No. 39以前の論集：院生・学生は4割引，正会員は2割引

No. 40以降　　：院生・学生のみ2割引

論集の割引は，とくに経済的な困難をかかえながらも，日夜研究をつづけている院生・学生諸氏への優遇を重点におきました．なお，院生・学正会員諸氏への優遇措置は，各号につき一人一冊と限らせていただきます．申込みの際，「院生」あるいは「学生」会員であることを明記下さい．

委員会だより

☆科研費問題検討小委員会

科研費申請有資格者会員の皆さまへ 文部省科研費補助金の申請について

平成11（1999）年度文部省科学研究費補助金のうち，一般研究者にとって最も身近な基盤研究，奨励研究（A）等の申請時期が近づいてきました．日本地質学会では地質学および関連分野全体の科研費を増やすために，科研費申請を毎年訴えてきました．今年も科研費申請有資格会員の皆さまに，一人でも多く，1件でも多く，分科「地球科学」の細目「地質学」・「層位・古生物学」・「岩石・鉱物・鉱床学」・時限付き分科細目「自然史科学」等へ科研費申請をされることを訴えます．

科研費をとりまく状況は，予算額や採択率でかなり改善されてはきていますが，大きくは変わってはいません．今年も例年どおり，科研費の配分は各専門分野ごとの申請件数と申請額に基づいて決定され，多数の申請があればあるだけ，それだけその分野での採択件数が増加します．よって，地質学および関連分野全体の科研費を増やすためには，まず科研費申請件数と申請額を増やす努力が必要です．それ故，学会員各自が自分の科研費を獲得するために何はさておき申請することは最も大事なことですが，そのことが地質学および関連分野全体の科研費増加に大いに貢献することになります．しかしながら，最近の上記の分科・細目への申請件数は，必ずしも増加していないと言われています．このことは環境問題や災害関連の研究費との絡みもありますが，文部省科研費へのとりくみは重要だと思われます．さらに，国立大学の予算は，今年から財政改革のあおりをくって15％程度カットされます．文部省は，校費が少なくなった分を科研費で充当するよう勧めています．このような状況から，科研費獲得への取り組みはより一層重要になってきています．

日本地質学会の科研費申請有資格会員の皆さまにおかれましては，科研費を少しでも多く獲得して地質学および関連分野の研究レベルをより一層あげるために，分科「地球科学」の細目「地質学」・「層位・古生物学」・「岩石・鉱物・鉱床学」等および時限付き分科細目「自然史科学」へ，例年にもまして1件でも多く科研費申請していただくよう，再度訴えます．なお，科研費問題検討小委員会では，日本地質学会のホームページで科研費に関するアップデイトな情報を見ていただけるよう，改訂を進めています．

専門部会コーナー

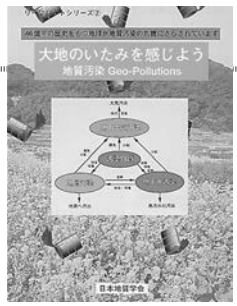
構造地質

Journal of Structural Geologyの 日本地質学会・会員の個人特別購読

日本地質学会の会員は，構造地質学の標準的な国際誌であるJournal of Structural Geology（JSG）を特別価格で購読することができます．変形微細組織と地質構造のきれいな写真が多数掲載され，同誌を見れば構造地質学の国際的な研究の動向を知ることができます．地質学会・会員の特典ですので，院生会員など，これから構造地質学を始めようとしている方々にも購読をお勧めします．この雑誌は，構造地質学とテクトニクスに関する国際的な連絡機構であるIASTG（International Association on Structural/Tectonic Geologists）の連絡誌としての役割もはたしております．わが国の構造地質研究会も，IASTGの支援団体となっております．

来年度の年間特別購読料は，送料込みで191オランダギルダー（円が下がったので13,000円あまり）です．A4判の月刊誌で，年間総頁数が約1,600頁，1冊1,000円余りで手頃な価格です．JSGの購読申し込みは，地質学会・会員であることを述べて，エルゼビアサイエンス［株］（カスタマーサービス係；Tel. 03–5561–5033, Fax. 03–5561–5045，メール：info@elsevier.co.jp）まで．電子メールでも申し込み可能．クレジットカード（VISA，Mastercard，Am. Express）で支払うと送金料がかかりません．特別購読はあくまで個人用です．

（嶋本利彦・文責）



☆リーフレットシリーズ第2作

「大地のいたみを感じよう―地質汚染 Geo–Pollutions」

好評発売中！

1995年発行したシリーズ第1作「大地の動きを知ろう―地震・活断層・地震災害―」は，A2判裏表にカラー印刷というスタイルが，ハンディーで，さらにポスターにもなることで好評でした．第2作は環境地質研究委員会編集の地質汚染のリーフレットで，前リーフレット同様，会員の方には一部無料配布いたしますので，以下の要領でお申し込み下さい．

配布方法：会員本人には一部無料配布．それ以上の部数をご希望の場合，および非会員の方には，一部300円とさせていただきます．

申込み方法：学会事務局あて，必要部数を記入し，返信封筒（宛名を書き，郵送料分の切手貼付のこと）を入れてお申し込み下さい．なお，サイズが横15cm×縦21cm，重さが1部25gですので，一部郵送につきましては，以下のようにお願いいたします．

- 定形封筒の場合：90円切手貼付．ただし，二つ折にしての郵送となります．
- 定形外（15×21cm以上）封筒の場合：130円切手を貼付．
  一部以上の場合，部数×200円の代金と下記の郵送料を合わせて，切手でお送り下さい．（例，郵送料3部まで160円，8部まで270円，17部まで390円，20部まで580円）．20部以上の送付希望の方は，事務局までお問い合わせ下さい．

今号では，研究室紹介は休稿とさせていただきましたが，研究室紹介や海外学会巡検報告についても常時投稿をお待ちしておりますので，よろしくお願いいたします．

院生コーナーの編集は以下の3人で行っておりますので投稿は以下のメールアドレス宛でe-mailでいただければ幸いです．

yoshino@geol.s.u-tokyo.ac.jp　芳野　極（東大）
696g5059@mn.waseda.ac.jp　澤口　隆（早大）
massago@geo.titech.ac.jp　真砂英樹（東工大）

南アフリカ＆レソト王国紀行

（第7回International Kimberlite Conferenceに参加して）

東京工業大学理学部地球惑星科学教室（職員）阿部なつ江

www : http://www.geo.titech.ac.jp/yurimotolab/abentsu/index.html

International Kimberlite Conference（キンバライト会議）：

1998年4月13～17日にかけて，第7回キンバライト会議が南アフリカ，ケープタウン大学で開催された．記念すべき第1回大会が，やはりこの南アフリカで開催されている．25年前のことである．その第1回大会には，今日高圧実験やかんらん岩岩石学の分野で活躍する多くの研究者が参加している．ほぼ4年に1度の間隔で開催されているこの会議は，その名の通りキンバライトに関するさまざまな研究を発表する会議である．私の専門であるマントルかんらん岩捕獲岩の研究者が，最も多く集まる会議でもあり，私は学生時代から参加を切望していた．今回の参加者は約450名．日本からの参加者は私を含めてたった5名であった．キンバライト会議自体，日本からの参加者が少ないこと，また，日本人がほとんど訪れたことのない南部アフリカの小さな王国“レソト王国”へ今回巡検で訪れることができたので，特に印象に残った出来事をこのコーナーで紹介したいと思う．

今回の会議参加の目的は，研究発表もさることながら，キンバライト中のマントル捕獲岩を採集することにあった．目的は見事に達成され，会議前後の2回の巡検では，合計200kgにも及ぶサンプルを採集し，周囲の人をあきれさせている次第である．

レソト王国：

“The Kingdom in the Sky”と呼ばれるその王国は，国土に標高1,000m以下の地点を持たない世界で唯一の国，まさに天空の王国である．関東地方程度しかないその国土は，周囲を全て南アフリカ共和国に囲まれている．人口約200万人，主な産業は農耕と牧畜．冬場は雪が積り，水は豊富で各地でダムが建設され，水力発電が盛んである．しかし，レソト自体ではほとんど電気を使わない生活をしているため，得られる電力は水とともに南アフリカへ供給している．人々は，ほぼ自給自足の生活をしており，電気も水道も整っていない小さなきのこのようなかわいいお家（写真1）での生活には，豊かでゆとりのある雰囲気が感じられた．このレソト王国は，南部アフリカで唯一白人支配を受けていない，現地先住民族の誇り高き国家で，今も白人の人口は1%以下である．

De Beersの若者：

巡検参加者は50名．日本人は私一人であった．ケープタウンの空港に集合し，チャーター便でオレンジ州の州都ブルームフォンテンに飛び，そこから大型バスで国境の町フィックスブルグへ向かった．フィックスブルグからはランドクルーザー15台に分乗し，レソトへと向かった（写真2．レソト入国審査待ち）．15台の車を運

転するのは，世界のダイアモンド市場を握るDe Beers Companyの若き研究者達である．彼らがレソトの道なき道を朝から晩まで運転してくれたおかげで，今回の巡検は滞りなく成功を修めることができた．話は前後するが，レソト巡検の最終日，レソト王国を離れ，再び南アフリカ，ブルームフォンテンへ移動して最後の夜を過ごした．ハードロック・カフェでの夕食であった．巡検，研究，お国自慢など思い思いの話していたが，De Beersの若者達は，もうドライブもしなくて良いという開放感に満ちていたのであろう，各人に配られたその日のメニューの紙（A4サイズ）で，飛行機を折りはじめ，飛ばし始めた．しかもその飛行機には胡椒や塩がたっぷりとふられ，飛行軌跡下の人々に降り注ぐという具合である．

そこかしこで塩胡椒がまぶされた飛行機が飛び交い，修学旅行の枕投げのような光景が繰り広げられた．驚いたことに，かなり年輩の人たちも，特に怒る風でもなく，一緒になって塩胡椒を振りかけた紙を投げ合って楽しんでいた．日本だったら，即刻店からつまみ出されるところだが，店の人たちもただ眺めていただけだった．目を丸くしている私に「Natsue, This is not tipical Western custom. Never mind!」といってくれた人がいて，救われた気分だった．

レソトの子供達（写真3）：

“Give me sweet!”戦後日本の子ども達が進駐軍のジープに向かって叫んでいるのではない．レソトの子供達が，白人の車に向かって手を出しながら“Give me sweet!”と叫んで走り寄ってくるのである．他の巡検参加者（アジア人は私一人であった）は，おもしろがって見ていたが，戦後の話を親たちに聞いている私は，非常に複雑な思いがした．大自然の中で，特に食べるものに困っている様子はない．しかし，どうしてもキャンディー，チョコレートなど，子供達が欲しがる菓子類は不足しているようである．白人と見るとキャンディー欲しさに手を出す習慣になっているようである．

院生コーナー

南アフリカ：

ヨハネスブルグの街中の物騒な話しか聞いていなかったため，地方ののどかな光景は予想外のものであった．確かに，ケープタウンくらい大きな街の郊外には，トタンを組み合わせただけの広さにして四畳程度のバラックが軒を連ねた地区が見られたが，街中には観光客があふれ，要所要所には警察官が立っていたため，いたって治安の良い場所であった．特にブルームフォンテンの近郊は非常に治安が良く，夜中に一人で歩いていても東京よりも安全そうな場所であった．見渡す限り地平線の彼方まで，人っ子一人いないフィールドは，テレビで見る大草原の小さな家さながらのさわやかな草原の風が吹いていた．案内人の一人が「1日のフィールド調査が終わって，この風に吹かれながら一息付くときが，Geologistとして最高に幸せな瞬間だ」と語ってくれた．

その他1　陸亀（写真4）：

南アフリカ，ジャゴスフォンテン・パイプ（世界で一番深いキンバライト・パイプと考えられている）の周りで，径30cm程度の礫をハンマーでたたきながらゼノリスを探していたときのこと．ちょうど同じくらいの大きさのかわいい陸亀が石と一緒に並んでいた．巡検に参加した人の一人が，間違って軽くたたいてしまい，迷惑そうにのそのそと動き出した．

その他2　レソト産ビール（写真5）：

MALUTI．The Kingdom in the SKYの文字が刻まれているこのラベルは，レソトの雰囲気を良く表している．四隅の三角形は，“バソトハット”と呼ばれるレソトの伝統的な帽子．

最後に：

初めてのアフリカ大陸は，見渡す限りの草原と，そこを吹き抜ける風の音が遠くの地平線から聞こえてくる，本当に広い広い大地が印象的だった．その広い大地で，大好きなかんらん岩捕獲岩の大漁を喜びつつ大きく深呼吸する瞬間は，研究を続けていて本当に良かったと思えるときであると同時に，いつまでもこの気持ちを忘れずに研究を続けられればと思うひとときでもある．

支部コーナー

☆関東支部

ご案内

第10回地質汚染（土壌を含めた地層汚染・地下空気汚染・地下水汚染）技術研修会のお知らせ（第2報再掲）

7月号の第1報でお知らせいたしました研修会の日時・申込み方法・期限などについて下記のとおり決定いたしましたのでご案内いたします．

日　時：平成10年11月4日（水）～11月7日（土）3泊4日
場　所：サンピア君津　千葉県君津市法木384-119
　　電話 0439-32-3332　Fax 0439-32-3399
費　用：日本地質学会会員・賛助会員70,000円，一般80,000円
　　（テキスト・宿泊・食事を含む）
スケジュール（予定）
［1日目］
平成10年11月4日（水）13時　JR内房線君津駅　中野口交番前集合　開講式　地質学基礎講座　地質汚染基礎講座　地質汚染の現状　懇親会
［2日目］
環境監査と地質汚染リスク　千葉県の地質汚染対策の現状　地質汚染調査技法Ⅰ　久留里市場汚染現場の汚染機構と浄化　地質汚染簡易測定法　久留里市場汚染現場見学と実習　地層の連続と不連続
［3日目］
土壌の見方と機能　現場分析とラボ分析　地質汚染調査技法Ⅱ　ボーリングコア観察の記載と分析実習　地下水の流れ方　地下水流動とシュミレーション
［4日目］
地質汚染浄化とモニタリング　残土が及ぼす地質環境リスク　内箕輪地質汚染汚染現場の調査と現地見学　閉講式
【募集人数】50名
【申込み方法】下記の申込用紙を参考に，Faxまたは郵送でお申し込み下さい．追ってご参加の可否を連絡させていただきます．

第10回地質汚染技術研修会　申込用紙

フリガナ
氏　　名
　　（年齢　　才　男・女）
所　　属
連絡先住所
電話　　Fax

【申込み期限】10月12日（月）（先着順に受け付けますので，定員になり次第締め切らせていただきます）
【申　込　先】〒135-0007 東京都江東区新大橋1-8-11
　　明治コンサルタント(株)東京支店　佐藤尚弘
　　電話 03-5624-2514　Fax 03-5624-2589
問い合わせ先
佐藤尚弘（同上）
石山英樹（君津市教育部）電話 0439-56-1692
佐藤賢司（千葉県地質環境研究室）電話 043-243-0261
上砂正一（明治コンサルタント(株)環境地質部）
電話 0727-51-1659
手塚裕樹（アジア航測(株)）電話 03-5379-3228
緒方信一（中央開発(株)）電話 048-250-1413

（緒方信一記）

学 会 記 事

1998年度第2回定例評議員会 議事抄録

1998年9月1日
日本地質学会　評議員会議長　　小泉　格

日　時：1998年6月20日（土）12：30〜18：00
場　所：早稲田大学国際会議場第2会議室
出席者：小松正幸会長，坂　幸恭・徳岡隆夫副会長，小泉　格評議員会議長
足立勝治，足立久男，赤羽貞幸（代公文），赤羽久忠，秋葉文雄，天野一男，飯川健勝，磯崎行雄，板谷徹丸，上砂正一，永広昌之，川辺孝幸，木村　学，菊地隆男，久保和也，公文富士夫，熊井久雄（代八尾），小井土由光，小出良幸，小林和宏，佐々木和彦（代足立（勝）），佐瀬和義，斎藤靖二（代天野），酒井治孝（代磯崎），柴　正博，柴崎直明，嶋本利彦，田結庄良昭，田崎和江，平朝彦（代新妻），高須　晃，高橋正樹，高安克己，滝田良基，巽　好幸（代木村），徳橋秀一，鳥海光弘，那須孝悌，新妻信明，楡井　久，野村哲，堀川秀夫，真砂英樹，丸山茂徳，別所孝範，八尾　昭，吉田武義，芳野　極　各評議員　水野篤行（事務局）

冒頭に小泉　格評議員会議長より，傍聴希望の金井克明会員が校務のために傍聴ができなくなった旨の紹介があった．

報告事項

1.　執行委員会報告

(1) 第一庶務委員会

天野一男第一庶務委員長より配布資料に基づき，次の報告があった．

1)　次の研究助成等の推薦依頼・募集があった．
(1) トヨタ財団1998年度研究助成（基本テーマ：多元価値社会の創造）（これからの地球環境と人間生存の可能性，ほか）（締め切り：5.29）
(2) 第25回日産学術研究助成（締め切り：8.31）．
(3) (財)日本学術協力財団，「平成10年度日本学術協力財団主催学術シンポジウム」の企画募集（締め切り：6.30）
(4) (財)資源環境観測解析センター，「ASTERデータの利用に関する研究公募」．
(5)「平成10年度東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成」の候補者推薦．締め切り10月9日（ニュース誌，1–6に掲載）．
(6) 1999年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者および研究助成候補者の推薦．締め切り：猿橋賞，11月30日，研究助成，11月末日と1999年4月末日の2回（ニュース誌，1–6に掲載）．

2)　次の共催・協賛・後援等を承諾した．
(1) 鹿児島大学理学部大塚裕之教授（鹿児島大学国際シンポジウム実行委員会代表）に対して，鹿児島大学主催，国際シンポジウム「琉球列島（南西諸島）—島嶼型動物相の適応放散と絶滅の舞台—」（98. 11. 5〜11. 7，鹿児島大学稲盛会館）の後援（4.10付け）．
(2) (財)日本科学技術振興財団に対して，「'98青少年のための科学の祭典」に対する後援と協力（5.12付け）．
(3) ゼオライト学会に対して，「第14回ゼオライト研究発表会」（11. 12〜13）の協賛（5.12付け）．
(4) 日本粘土学会に対して，「第42回粘土科学討論会」（10. 6〜8）の共催（5.15付け）．

3)　文部省学術情報センターより学術情報センター電子図書館事業への参加協力依頼があった．検討の結果，情報公開の観点から参加協力を行う方向で検討を進めてきた．本評議員会において参加協力の可否・内容について審議をお願いしたい．（議題へ）

4)　毎年行われている地質科学関係学会懇談会が7月8日に日本学術会議で開催される予定である旨の連絡が地質科学総合研連鎮西清高委員長よりあり，関係者が出席することとした．

5)　新潟県教育長宛に5月12日付けで，会長名による要望書「高等学校における地学教員採用についての要望書」を提出した．
　なお，本評議員会で，全国の都道府県の教育長宛にも同様な要望書を提出することを了承した．なお，この問題については地質学会としてもっと根本的に考えていくべきであるとの意見が出された．

6)　下記の1998年度選挙委員会委員が各支部より推薦された．本評議員会でこれを了承し，7月1日付けで会長名の委嘱を行うこととした．
北海道支部：福沢仁之
東 北 支 部：鈴木毅彦
関 東 支 部：手塚裕樹
関 西 支 部：坂本正徳
西日本支部：辻　隆司

　なお，東北支部長として矢内桂三会員が選出されたとの報告があった．

7)　執行委員会において，日本地質学会（The Geological Society of Japan）の英語略称を，秋山雅彦前会長の提案に従って，JGSとすることとしたが了承して欲しい．
　本件については，とくに異論なく了承された．

8)　地球化学・宇宙化学研連委員長より6月3日付けで，平成11年度文部省科学研究費補助金の審査委員候補者に関し，細目「地球化学」の第1段委員候補者を1名，7月11日（必着）までに推薦して欲しい旨の連絡があった（科研費小委員会八尾委員長に連絡済み）．

9)　文部省学術情報課長名により6月3日付けで，6月30日（火）14：00〜16：30に開催される「平成10年度学会法人等連絡協議会」に対する学会代表者の出席依頼があった．水野事務局長に出席を依頼することとした．

10)　(財)日本学術協力財団より6月1日付けで，平成10年度（平成10年9月1日〜11年2月10日に開催予定の）学術シンポジウムの企画募集があった．締め切りは6月30日．申請した企画案は「学術シンポジウム開催委員会」で審査され，決定される．シンポジウムの開催経費は30万円程度を目安とし，財団と学会が折半分担することとなる．

11)　地理関連学会連合発足準備会世話人より6月4日付けで，3月27日に開催された同準備会の討議結果が送付された．16学会の出席による討議の結果，準備会から総会への移行は当面延期することとなったが，今後のできる限り早い発足に向けて準備世話人会を立ち上げ，連合のあり方や具体的な活動内容を詰めることとなった．

12)　藤田至則会員より6月9日付けで評議員会宛に，「評議員会（秋山・斎藤両会員による）回答に対する批判と要望」が送付された．

13)　6月7日付けで金井克明会員より本評議員会の傍聴希望が提出された．

14)　斎藤常正会員を通じて連絡のあった，北大中嶋　悟教授による「放射性廃棄物地層処分に関わる基礎研究の振興について」の要望書提出の呼びかけ文書が紹介された．

(2) 第二庶務委員会

久保和也第二庶務委員長より配布資料に基づき，次の報告があった．

1） 地質学論集の売上状況（1998年5月末現在）

No.30 (1988)	No.31 (1988)	No.32 (1989)	No.33 (1989)	No.34 (1990)	No.35 (1990)	No.36 (1990)
1500	1000	1100	1000	1000	1500	1000
1368	778	939	763	817	973	891
No.37 (1992)	No.38 (1992)	No.39 (1992)	No.40 (1993)	No.41 (1993)	No.42 (1993)	No.43 (1994)
1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
777	784	647	638	715	727	752
No.44 (1995)	No.45 (1995)	No.46 (1996)	No.47 (1997)	No.48 (1997)	No.49 (1998)	No.50 (1998)
1000	1500	1000	1000	1000	1000	1000
474	1217	520	307	485	191	
No.51 (1998)						
1000						
181						

1 号数の下の（ ）中は発行年度
2 第1段は発行部数
3 第2段は総売上部数

既刊行の論集の内売れ行きの悪いものについてその原因を分析する必要があると指摘され，さらに，その際，今後刊行企画の承認を行う際に基礎となるデータをとるようにして欲しいとの意見が出された．

2） 地質学論集の刊行について

（1）50号 狩野謙一ほか編：21世紀の構造地質学に向けて

現在最終印刷工程に入っており，近く発行の見込み．1,000部印刷（イセブ）．

構造地質研究会の雑誌「構造地質」を兼ね，同研究会が会員分（550部）を買い取る．会計委員会と協議，さらに執行委員会での検討の上，最終見積額（約110万円プラス消費税）に基づいて，頒布価格を2,500円とし，研究会の買い取り分については価格を2,000円とすることとした．

なお，大量買い取りの際のディスカウント価格については，今後個別的に考えていくこととした．

（2）新規刊行企画案として，木村克己（連絡責任者）ほか編「ジュラ紀付加体の起源と形成過程」が提出された．（議題へ）

（3）会計委員会

足立勝治執行委員長（会計委員長代行）より配布資料に基づき，次の報告があった．

1） 1998年1月～5月の会計報告

順調に推移している．

2） 各賞基金の決算報告

（4月15日現在）

入金：675,000円

200,000円 （社）全地連協賛金
250,000円 （財）深田研共催分担金
225,000円 1997年度第4回定例評議員会での役員有志の拠金

支出：451,825円

270,000円 アーンスト氏（夫妻）旅費（一部）
144,525円 同 宿泊費
14,900円 旧会長招待昼食会
22,400円 新会長招待夕食会
420円 送金手数料

残金：222,755円（“特別会計”として通常会計とは別に専用口座を設けて管理中）

その後，地質学会側とアーンスト氏との間の日程調整がおくれたことにより，当初日程の変更に伴って航空券の代金が上がり，同氏が27万円を立て替えていたことが分かり，22万円を上記の現在額（4月15日現在）から支出し，残額を丸山・嶋本両評議員が支出することとなった．

［なお，6月20日付けで丸山・嶋本両評議員より本基金に対して5万円の寄付がなされ，6月20日現在の基金残額は272,755円となった］

第4回定例評議員会における拠金者名簿（34名，50音順）：足立久男・赤羽久忠・赤羽貞幸・秋葉文雄・秋山雅彦・天野一男・板谷徹丸・飯川健勝・上砂正一・木村学・熊井久雄・公文富士夫・小泉 格・小松正幸・斎藤常正・坂 幸恭・嶋本利彦・田結庄良昭・高橋正樹・高須 晃・高安克己・滝田良基・角田史雄・徳橋秀一・那須孝悌・新妻信明・楡井 久・野村 哲・濱本拓志・久富邦彦・平社定夫・丸山茂徳・八尾 昭・矢野孝雄．

3） 名誉会員古川和代氏より50,000円の寄付が寄せられた．

4） 本年松本大会の際に開催される市民講演会「地球の不思議にせまる」（開催責任者：秋山雅彦）に対する平成10年度文部省科学研究費補助金（予算要求：1,100千円）の申請をしていたところ，文部省より採択内定（交付内定額：1,100千円）の通知があった．

5） 会員の預金口座振替による会費等の引き落とし払込について（株）三井ファイナンスサービスと検討・協議を進めてきた．その結果，会員，事務局の会費等事務処理の上に大きなメリットがあると考えられるので，希望する会員に対して会費・アイランドアーク購読費を対象として実施することとしたい．議題として審議の上，了承されれば，会員に対して広報を進め，可能ならば来年度分より実施に移す計画である．（議題へ）

（4）会員委員会

滝田良基会員委員長より配布資料に基づき，次の報告があった．

1） 会員の動静（5月末現在）

	賛助	名誉	正会員	院生	学生	合計
1998. 2.28	57	35	4610	528	37	5267
1997. 5.31	55	56	4599	556	47	5313
増・減	−2	+21	−11	+28	+10	+46

2） 次の入会承認を行った（敬称略）．計119名

賛助会員（1）：三井鉱山エンジニアリング（4. 13）

正会員（34）：大坂健二，山川 稔，越川憲一，田中義浩，市川八州夫，小川 誠，山田靖司，伊藤知佳，成田健，北山依志，中村貴子，安井真也（以上4. 13），佐々木宗建，小坂英輝，阿部なつ江，上原利明，中野雅子，土田邦博（以上5. 18），大山洋一，諏訪 健，星野耕一，山本隆広，羽部知宏，谷本 学，河野啓幸，宮崎こずえ，川辺賢一，二ノ宮 淳，大垣泰宏，佐藤智洋（以上6. 10），田中利和，内野善朗，小池伯一，森本幸男（以上6. 20）

院生会員（75）：武田好文，杉山直起，鹿納晴尚，山崎隆弘，角島和之，山崎暁子，関戸智寛，小田原 啓，横山正典，野澤暁史，長井雅史（以上4. 13），新井慶将，山本芳幸，斉藤紀子，本尾朝光，増田優記，Rajneesh, Kumar，涌川寛子，石濱茂崇，小柳津 篤，太田 亨，西田和浩，白石健太郎，斉藤尚士，角田真一，鈴木洋平，新妻祥子，Dicky, Muslim（以上5. 18）青木 淳．小岩修平，神保 啓，白旗克志，川畑博，高野 直，大高 暁，藤井秀憲，松岡 淳，木村 真，上杉次郎，小沢広和，川村喜一郎，大田恭史，武田哲一，本谷 充，橋本智雄，久留景吾，高野壮太郎，石垣朝子，河村博之，荘 泰彦，和田元子，安野泰伸，卜部暁子，鵜野 光，河上哲生，小原友弘，太田彩乃，内尾優子，伊藤元人，一瀬めぐみ（以上6. 10），近重史朗，Moragalle Warna Kumara Weerakoon，堀口瑞穂，大崎博之，松永絹子，徳永陽子，笠間亜樹，本田幸子，楢原 守，神田幸穂，田村明弘，上田夏代，近藤美紀，宮本浩二，藤永公一郎（以上6. 20）

学生会員（8）：河本和朗，池亀吾郎，奥沢康一（以上4. 13），岩下洋平，永井勝也，満川知代（以上5. 18），佐々木加奈子（6. 10），坂本雄一（6. 20）

3） 逝去者（敬称略）計4名

正会員（4）：秦 光男（1998. 3. 30），小野晃司（1998. 4. 22），秋山 純（1997. 12. 9），高野幸雄（1998. 4. 23）

4） 次の退会承認を行った（敬称略）．計11名

賛助会員（2）：三井石炭鉱業株式会社（4. 13），メトバ株式会社（6. 10）

正会員（9）：安達忠英，伊藤太一，石井英二，角田地文，渋谷朝紀，兪 剛（以上4. 13），新津 誠，林 信一（以上5. 18），陶山一也（6. 10）

5） 名誉会員の推薦スケジュールについて

9月末頃支部に推薦依頼を行う（10月末締め切り）．第3回定例評議員会に候補者名簿を提出し，候補者を決定．総会に推薦することとした．

6） 除籍対象会員について

第2回定例評議員会に候補者リストを提示，8月末までに会費の入金がない会員に対して，第3回定例評議員会で除籍を決定する．

7） 一定の収入のある社会人院生や特別研究員（学振など）の扱いについて

院生会員として扱うことは，本来の主旨から外れ，不公平感があるとの指摘があり，院生評議員を中心として検討してもらうとともに，会員委員会でさらに検討することとした．

8） 1998年度版会員名簿の作成について

作成のスケジュール，記載事項について検討した．（議題へ）

9） その他

・会員名簿掲載広告の料金について広業社と協議の結果，前回と同一とすることとした．

・賛助会員への松本大会時の特別掲示に関する案内を早急に送付する．

(5) 編集委員会

鳥海光弘編集委員長および高橋正樹副編集委員長より配布資料に基づき次の報告があった．

1） 地質学雑誌の編集状況（6月10日現在）

104–6　論説　5　短報　2　（校正中）
104–7　論説　5　短報　2　（入稿済み）
手持ち論文　論説　10　短報　0
査読中論文　57
投稿数（1998年）　論説（和文 42，英文 4）　総説（和文 1）　短報（和文 10，英文 6）
合計 63（昨年比 ＋10）口絵 6
査読中論文 63

2） 地質学雑誌の編集について

順調に進んでいる．編集委員会では，最近投稿の口絵原稿の説明が長すぎる傾向となっていることが問題になっている．

3） 地質学会ニュースの編集について

ニュース誌は非常に評判がよい．また，会員とのコミュニケーションがよくなった．ニュース誌編集委員会を6月15日に事務局において8名の出席のもとに開催した．今後の編集方針について自由討論を行い，また次のように分野・階層別の幹事を決定し，それぞれ各階層のニュースを集約することとした．

民間会社担当：上砂正一・梅沢俊一
官公庁担当：有田正史・香村一夫
小中高教員担当：阿部国広
博物館担当：松岡敬二・松島義章・蟹江康光・神戸信和
生涯教育担当：神戸信和・松島義章
大学院担当：澤口　隆・芳野　極
カレンダー担当：牧野泰彦
レイアウト担当：渡部芳夫

ニュース誌編集委員会委員（任期2年）は次のとおりである．

牧野泰彦・香村一夫・渡部芳夫（編集委員会），多田隆治（大学），溝口　隆・芳野　極（大学院），足立勝治・上砂正一・梅沢俊一（民間会社），有田正史・三田直樹・鈴木喜計（官公庁），阿部国広（小中高教員），松岡敬二・蟹江康光・松島義章・神戸信和（博物館・生涯教育）．

(6) 行事委員会

磯﨑行雄行事委員長より次の報告があった．

1） 第105年会（1998年松本大会）（準備委員長：秋山雅彦）について

松本（9月25日～27日）において開催．7月4日（土），18日（土）に行事委員会を行って，プログラムを決定する．文部省より4月8日付けで，シンポジウム（地球の不思議にせまる）（9.26午後）に対する「研究成果公開発表（B）」の採択通知（交付内定額：110万円）があった．

松本大会においてセッション数が53あることに対して数が多すぎるのではないか？との質問が出され，行事委員長よりその経緯が説明され，またプログラム編成にあたって必要に応じて調整を行うこと，原則として希望するセッションで講演してもらうことが述べられた．さらに，専門部会のランチョンの日程に関して，関連する部会が同一日とならないよう配慮して欲しいとの要望が出された．

松本大会時に行われる甲信越情報展に対しては準備期間が充分にないことから，できる範囲で取り組むよう普及教育委員会で検討を進めることとしている．

2） 第106年（1999年）総会について

早稲田大学において1999年3月26日～27日に開催する．

3） 第106年（1999年）年会について

名古屋大学において1999年10月9日～11日（土～月）に開催する．すでに準備委員会（準備委員長；足立　守）が発足，6月6日に名古屋近辺の大学・博物館の研究者（約20名）が集まり，いろいろな角度から議論した．名古屋大学の研究者を中心に，愛知教育大学・岐阜大学・名城大学等の研究者で大会準備・運営を行う．小井土由光評議員より準備状況に関して補足説明があった．なお，吉田武義評議員より，神戸における火山学会の秋季大会と完全に重なるとの情報の連絡があった．

5） 第107年（2000年）総会について

筑波大学での開催を同大学地球科学系に依頼中．

6） 第107年（2000年）年会について

秋田大学での開催を依頼したところ，6月2日付けで同大学地球資源学科学科長より開催辞退の回答があった．

7） 地球惑星科学連合連絡会に対して，北海道大学新井田会員をプログラム委員として推薦した．

8） 平野弘道会員より6月15日付けで古生物学専門部会の設立申請が出された．（議題へ）

(7) 国際交流委員会

木村　学国際交流委員長より次の報告があった．

ハンガリー地質学会会長（Dr. Istavan (Steve) Berzi）が，石油公団石油開発技術センター研究企画室の井出久之氏とともに4月15日に地質学会事務局を表敬訪問され，水野事務局長が対応，両学会の現況等について相互に紹介，懇談した．

これに関連し，国際対応は本学会として重要であるので，今後会長・副会長がきちんとした対応をすることが必要との意見が述べられた．

(8) その他

足立勝治執行委員長より次の報告があり，了承を得た．

1） 各常置委員会委員候補者（編集委員会を除く）を下記のように決めた．

第一庶務委員会：立石雅昭・向山　栄
第二庶務委員会：高橋　浩（ユタカ）
会計委員会：上砂正一・市川八州夫
会員委員会：中田節也・鈴木弘明
行事委員会：未定
国際交流委員会：徐　垣（交渉中）

2） 1997年度第4回定例評議員会で執行委員会に付託された本年度委員会の構成案について，執行委員会において原案を作成した後，それぞれの関係者と協議・検討の結果，それぞれ最終的構成案を作成した．（議題へ）

2. 研究委員会報告

(1) 地学教育研究委員会

堀川秀夫委員より配布資料により次の報告があった．

本年3月27日に委員会を行い，下記について協議した．

1） 地学教育研究委員会と普及教育実行委員会との関係について：両委員会の合同会議を行うことを検討する．

2） 松本大会における夜間小集会について：地質学の重要性を訴える夜間小集会とする．講演2～3人．地元の人に聴きにきてもらう．地元の先生が子供たちと一緒に取り組める内容がよい．普及教育実行委員会と合同で行うことを考える．

3） 3学会合同セミナー

4） その他：中教審の中間まとめが今月出る予定．その他，当面の問題について自由討論した．

なお，上記1）を受けて，5月31日に新潟県王子会館で普及教育実行委員会との合同会議が開催され，今後の方向に関して有意義な討論が行われた（普及教育実行委員会報告参照）．

(2) 南極地質研究委員会

本吉洋一委員より文書により下記の報告があった.

平成10年5月8日，SEAL計画（東南極リソスフェアの構造と進化研究計画）のワーキンググループ会合を極地研で開催した.

1) 第39次隊調査報告：3月28日に帰国した小山内康人（岡山大）から調査概要の報告があった．6名の調査隊員は当初アムンゼン湾トナー島で約2か月間の調査の予定であったが，昭和基地で急病人が発生したためにトナー島での計画が縮小を余儀なくされた．かわってリュツオ・ホルム湾のスカーレン，ラングホブデで約3週間の調査を行い，その後トナー島に約1か月滞在して詳細な地質調査を行うとともに，約5トンの岩石試料を採取した.

2) 第40次隊調査計画（本年11月出発）：本吉洋一（極地研）から説明があった．ヘリコプター2機を導入しての広域的調査の方針に変更はない．隊員候補の3名（本吉洋一，宮本智治，吉村康隆）はすでに冬山訓練と身体検査を終えている.

3) 第41次隊調査計画：来年実施のトナー島における人工地震探査計画について，金尾政紀から概要の説明があった.

4) 将来計画：2001年から始まる第VI期5か年計画策定のため，現段階での計画の概要説明とそれに対する意見交換を行った.

(3) 環境地質研究委員会

香村一夫委員より文書により環境地質研究委員会および環境地質部会の活動に関し，次の報告があった.

―シンポジウムの開催―

(1) 1998年10月28日（水） 東京・住友海上リスク総研大ホール

「環境保全と鉱物資源の活用―無害地質素材による汚染残土石などの環境浄化―」日本学術振興会第111委員会と共催

(2) 1998年11月28日（土）～29日（日） 大阪市立大学「第8回環境地質学シンポジウム」日本情報地質学会，日本鉱物学会（交渉中）と共催

［＊(1),(2)の詳細は，地質学会ニュース誌，1–6月号に掲載］

―その他―

(1)「上総掘りと自噴井の記念碑」建立に関して，建立実行委員会と協力して事業を進める．現在，発起人の依頼および会社および個人に賛助金を依頼中．年内に建立するとともに，記念普及講演会を開催予定.

(2) 本年9月にベトナム国へダイオキシン地質汚染調査団を派遣予定．（(社）工業技術振興協会およびハノイ大学との共同事業）

(4) 女性地球科学者の未来を考える研究委員会

田崎和江委員より，5月26日～29日に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた地球惑星合同学会の際に設置された保育室に関する報告があった．詳細はニュース誌，1–6に掲載したので省略する.

(5) 第一次地質基準策定委員会

新妻信明委員長より第8回第一次地質基準策定委員会に関し，配布資料に基づき次の報告があった.

日　時：1998年6月6日10 : 00–13 : 00

場　所：日本地質学会事務局

出席者：天野一男，服部　仁，早川俊之，水野篤行，新妻信明，宇田進一，上砂正一

1. 中間報告への反響

ニュース誌1998年3月号に掲載された中間報告に対する反響（本通信8）について討論を行った．中馬会員のコメントに従って「地質汚染」担当の上砂委員が本基準を検討することとした．谷会員の意見について討論した結果，「地質学の発展を取り入れ，日本の地質に対して適用可能な基準の策定」をまず行い，「国際的に基準化されていない付加体や火山岩類については国際基準化をも目指す」という本委員会の基本方針が再確認された．同様の方針は，「地層名命名基準策定委員会」においても採用されて進行中であることが紹介された．国際基準化においてはISOが重要であるので，本委員会に谷会員が委員として加わっていただくように依頼することとした.

2. 本年の委員会活動について

昨年と同様に月1回のペースで委員会を開催するが，本年末に最終答申を提出するので，より活発な活動が要請されることを確認した.

3. 各専門部会への中間報告検討依頼について

ニュース誌に掲載した中間報告に対して，各専門部会の検討を依頼する方法が検討された．検討結果は，本年1998年6月末日までにE–mailを委員長宛てに送付してもらうこととした．検討内容としては，1）その専門部会が関係する地質区分名，2）関係地質区分における問題点の指摘.

専門部会内における検討は，全登録者で行うことを依頼することとした．また，6月20日の評議員会においても依頼することとした.

4. 第一次地質基準公表の方法について

本委員会発足時の予定通り，1998年12月の評議員会に最終答申を提出することを確認した．評議員会への答申は，中間報告程度の長さが限界であり，要約に留まることになろう．また，会員にもその要約をニュース誌上で公表することになるであろう．しかし，実際に使用できる「地質基準」とするためには，充分な記述が必要であり，単行本としての刊行を検討することとした．また，この「地質基準」を広く知らせるために，学術会議の地質学研究連絡委員会にシンポジウムの開催を申請することとした.

5. 第一次地質基準の書式・記述内容について

中間報告に大きな問題が無いことから，「第一次地質基準」は，中間報告を基本として策定作業を進めることとした．実際に使用する「地質基準」としての文量を検討した結果，A4判で250頁程度が適当との結論に達した．中間報告に盛り込めなかった「人工地質」については，6月中にその中間報告の提出があった場合には，本基準に含めるかどうかを検討することとした.

限られた文量の「地質基準」における記述は，最小限に留める必要があり，細かい説明を行うことができない場合には，文献などを引用することになる．ただし，余りに専門的な文献は入手が困難であるので，引用できる範囲は，地質学会事務局で見ることができる程度のものとした.

6. 策定作業の分担について

中間報告において区分された各「地質体」の基準は，中間報告の責任者が当たることとした.

それぞれの地質体についての基準の説明において共通する内容があるので，共通項目の抽出作業を行い，分担を検討した．Dランクのものに共通項目が多いが，基本的に共通していても地質体毎の特殊な内容は，それぞれの地質体において記述することが確認された．共通項目とその分担委員は；1）文献調査：服部　2）空中写真・地形：足立，3）地質調査：宇田・天野・坂，4）物理探査：早川，5）ボーリング調査・現位置測定：籾倉・上砂・宇田，6）地質年代・古地磁気・同位体：酒井・新妻，7）岩石薄片・X線等：滝田・服部，これらの共通項目と各地質体の記述を「地質基準」に含めるとすると，それぞれA4版で120頁程度の文量が適当との結論に達した．この文量は地質学雑誌の1つの論文の長さに相当する.

具体的な書式については，早川委員が原案を準備し，7月の次回委員会で検討することとした.

7. 次回の委員会

日時：1998年7月9日（木）10 : 00から

場所：地質学会事務局

(6) Tectonic Map of Asia（CGMW）研究委員会

報告なし

(7) ヒマラヤ地質研究委員会

在田一則委員より，文書により次の報告があった.

1. 第13回ヒマラヤ–カラコルム–チベット国際ワークショップが4月20–22日，ペシャワール（パキスタン）で開催された．ヒマラヤ地質研究委員会ニュースで同ワークショップの宣伝活動を行った結

果，地質学会会員が多数参加した（安間了，在田一則，前田仁一郎，御子柴真澄，小笠原正継，銭谷竜一，末武晋一，村田守，山本啓司，芳野　極）．来年はドイツの予定．

2.　今秋の地質学会松本大会において，セッション（山脈の上昇と前縁・山間盆地の形成：ヒマラヤと日本）をヒマラヤ地質研究委員会世話人（在田一則，酒井治孝，中山勝博）がコンビーナーとなって開催の予定．また，夜間小集会を行い，今後の活動を検討する．

(8) テクトニクス研究委員会

木村　学委員長よりとくに報告することはないとの発言があった．

(9)「地質学と地震」研究委員会

嶋本利彦委員より次の報告があった．

先月の地球惑星関連合同大会において，関連分野の研究者と協力して，「活断層の動きを捉える――地震震源域の物理・化学・物質科学的解明（略称：活断層深部物性）」および「フォッサマグナ・日本海東縁・極東ロシアの地震テクトニクス（略称：地質大構造/テクトニクス）」を開催した．どちらのシンポジウムも，数分野の専門家が講演とポスター発表をおこない，大変盛況であった．「活断層深部物性」シンポでは，いくつかの断層掘削プロジェクトを中心に，断層岩・岩石レオロジー・地震・地殻変動・テクトニクス・地球化学などの研究者が，共通の問題意識をもって議論を進める場が定着しつつあるという印象を受けた．「地質大構造/テクトニクス」シンポでは，日本海東縁と極東ロシアの地質とテクトニクスを，基盤地質・活断層・テクトニクス・地殻変動・反射法探査などの結果に基づいて検討した．その結果，とくに極東ロシアに対して提唱されているプレートモデルは，主要活断層などの結果とうまく対応しないことが明らかになった．

このような学際的シンポジウムを今後も一層進める必要がある．本研究委員会では，今秋の地質学会でも断層岩と地震テクトニクスのシンポジウムを開催する予定である．また，今年度に採択された科学研究費・企画調査「震源域物質研究プロジェクトの準備」（代表者：小松正幸）の一部を用いて，研究委員会の活動を広げる予定である．

(10) 地層名命名規約策定委員会

天野一男委員長より次の報告があった．

1)　運営全般について

活動状況を広く会員に知らせ，意見等も集約する．具体的には，98年学術大会（信州大）での夜間小集会，98年総会（早稲田大）でのシンポジウム等を計画する．また，ニュース誌を通じて検討結果を随時公表する．今後，国際対応を進めたい．

2)　委員の役割分担

(1) 国際対応：IUGSの層位学委員会（ICS）の小委員会への対応．

Geochronology（兼岡，小委員会の日本代表，すでに地質研連として対応している）

Stratigraphic classification（天野，小委員会の日本代表）

Quantitative stratigraphy（適当な方に打診する）

(2) 分野別担当者：層序一般（能條・天野），生層序（八尾・平野・高山・小笠原）・シーケンス（保柳），古地磁気（新妻），付加体（木村），人工地層（楡井・清水），テフラ（新井・熊井），石油地質（秋葉氏に推薦依頼），土壌（楡井）．

3)　International Stratigraphic Guideの翻訳について

・出版については，「論集」，出版社からの出版等様々な可能性を探る．

・本文は，委員が担当を決めて翻訳中．9月16日締め切りで翻訳を終了する．

・グロッサリーについては委員が担当を決めて，翻訳を終了した．訳文（案）を第2回定例評議員会に報告，地質学会ニュース本年11月号に印刷予定．

4)　日本地質学会地層命名規約について

松本大会までに骨子（案）を作成する．夜間小集会でそれを提示し，会員からの意見を聴取する．ISGの内容との比較検討を行い，年度内には規約（案）を作成する予定．

(11) 研究企画委員会

木村　学委員長より，21世紀初頭の地質学界は何をめざしているかについて松本大会で議論の機会を作りたいと考えている．また10月までにそれまでの議論のまとめを出したいと述べられた．

(12) 各賞問題検討委員会

嶋本利彦委員長より配布資料に基づき，「国際賞の問題を中心として検討を行い，今後の検討事項案等を大要次のようにまとめた．とくに国際賞の英文名称の問題に関する今後の進め方について本評議員会の了承を得たい」と述べられた．

1.　委員会の課題

(1)「国際賞」の名称（とくに英語名称）．(2)「国際賞」に関する会則の整備（授賞対象者に関する若干の不備あり）．(3)「国際賞」と日本地質学会賞の違いの明白化．(4)学会賞の財源の明確化．(5)各賞にまつわる問題の整理，改善案の提案．

2.　「国際賞」の英語名称

International Awardとすることはおかしい．基金検討委員会では暫定的にGeological Society of Japan Medalとしたが，日本地質学会賞（Geological Society of Japan Award）と名称がよく似ている．国際的には人名をつけたものが圧倒的に多い．高額寄付者の名が付けられた例はあるが，大半は重要な業績を残した研究者の名が付けられている．本委員会としては後述の2点（今後の検討の進め方，国際賞名称選考の原則）について本評議員会の了承を得たい．

3.　国際賞に関する会則の整備，地質学会賞と「国際賞」の関係

現行の運営細則において，外国人の地質学会会員にはどちらの賞を出すのか，受賞者を日本人と外国人で区別するのはおかしい，地質学会賞と「国際賞」の違いが不明確（細則では地質学会賞は非会員にも授与できる）などの問題がある．本委員会としては，(1)両賞を地質学会の最高の賞とし，同列に扱う，(2)地質学会賞は会員を対象とし，国際賞は非会員を対象とする，(3)当面，国際賞は地質科学の基礎研究と日本の地質学界に貢献のあった人を対象とすることを提案したい．

4.　各賞の財源

募金検討委員会の答申と同じで，学会賞にまつわる費用は別会計・独立採算性として学会の自主努力によって行う．資金の調達は評議員・会員からの寄付，それ以外からの寄付も受け付ける．なお，国際賞に人名を付ける場合，メダルの制作費におおよそ100万円かかる見込みである．

5.　国際賞の授与にまつわる問題

窓口を国際交流委員会に一本化する．その他混乱防止のために実務面での詳しい規定が必要である．

6.　その他，各賞の選考制度，基準，手順の整備，寄付に関する税制対策等が必要であり，今後検討を行いたい．

本評議員会では以上について報告を受け，時間制約の上から，特に上記の第2項の今後の進め方について質疑応答の上，次のように了承した．「国際賞」の英語名称については，評議員会のほか，ニュース誌を通じて会員から意見を募集し（本年10月締め切り），以下の原則に基づいて名称案を作成してできれば12月の評議員会で提案する．A．人名を付けたメダルの場合の原則：(i)地質科学の幅広い分野で国際的に大きなインパクトを与えた研究者名をつける（citation indexもそのための判断材料とする）．(ii)日本地質学会の賞だから日本人の名称が望ましい．生存者か逝去者かは問わない．(iii)大口の寄付があれば，寄付者の名前を付けたメダルも可能性として考える．B．その他の名称を提案する場合の原則：(i)日本地質学会賞の英文名称と区別が明白であること．(ii)補足説明がなくても国際的に通用する名称であること．

3.　日本学術会議報告

斉藤常正日本学術会議会員より第128回総会（1998. 4. 22～23）と第4部会（1998. 4. 21～22）に関し，文書により報告があった．特記事項は次の通りである．

第128回総会：(1)平成10年度大学など基礎研究施設の運営費削減に対し，早急な改善を要望する主旨の緊急提案が第4部からなされ

たが，会長の希望で「会長談話」の形で処理することとなった．この種の財政問題については科学者としての考え方を表明しておくべきだということになった．(2)行政改革と日本学術会議の処遇について事務局から報告があった．日本学術会議は当面総務省に所属し，その在り方を総合科学技術会議で検討することになっている．学術会議として自らをどう位置づけるか意見交換を行った．(3)吉川会長から「21世紀の科学」のテーマで話題提供があり，意見交換が行われた．(4)教育・環境問題特別委員会の提唱で「世代を越えた持続的繁栄のためのシナリオ」について意見交換が行われた．

第4部会：(1)研究施設経費の削減に対し，総会で要望を決議する，という緊急提案をすることとなった（上記(1)参照）．第4部として，研究費の在り方について科学者としての考え方をまとめるための活動をすることとなった．(2)研連の見直し問題について和田部長より，第一常置委員会で何か動きがあったらそれに対応して考えるのがよいとの発言があった．(3)各研連の研究領域など明文化の問題について，第4部関係の研連・専門委に，今期の活動方針，計画をA4 1枚にまとめ提出してもらうこととなった．(4)文部省科学研究費の時限付き分科細目の設定について，理学総合連絡会議の議題として，各研連に問い合わせすることとする．(5)地域に関する研究について，第一常置委員会としてはとりあえず特別委員会の形で活動を始めることとしたい．

4.　各研究連絡委員会報告

(1) 地質学研連

天野一男研連委員より6月19日に開催された第17期第3回委員会における審議事項について，次の報告があった．

1)　国際陸上科学掘削計画（ICDP）に平成10年度より，防災科学研究所と地質調査所が窓口となって日本(科学技術庁)も参加することになり，日本の科学者・技術者も掘削プロポーザルを提出できるようになったことが報告された．この計画に対して，地質学研究連絡委員会のなかに小委員会を作って対応することとした．

2)　第31回IGCのテーマに関連して，日本の意見を集約していく必要があることが確認され，来年の夏ぐらいをめどに関連したシンポジウムを計画したらどうかとの意見が出され，次回の委員会から具体的に検討することとした．

3)　国立試験研究機関の見直しに関する日本学術会議会長の談話に関連して，地質科学に関連した国立試験研究機関の在り方について地質学研連として声明を出すことにした．

(2) 鉱物学研連

高須　晃鉱物研連委員より配布資料に基づき，6月5日に開催された第17期第3回鉱物研連・鉱床学専門委合同会議の議事内容に関する報告があった．

1)　研連の再編成問題について：7月から学術会議での本格的議論が始まるので，その様子を見ながら対応を考えることとなった．

2)　鉱物学研連・鉱床学専門委の研究領域に関する検討：末野委員長より，運営審議会付置関連研究連絡委員会等指定委員会に提出する鉱物研連と鉱床学専門委，及び地質科学総合研連の研究領域を表す文書の最終案が示され，了承された．

3)　2006年IMAの日本での開催誘致について：末野委員長よりこの件についてこれまでの経緯が説明され，今年8月のIMA総会に向け誘致の方向で取り組むことが提案され，種々議論された．結論を得るに至らず，必要があれば7月中に再度この問題について鉱物研連を開くことにした．

4)　本合同委員会（合同会議）の活動内容について：IMAの日本への誘致の問題や，岩鉱，鉱物，資源地質の3学会の連携について取り組むことの確認がされた．

5)　その他：超深地層研究所への提言について，中嶋委員より今年10月に動燃の組織替えでできる超深地層研究所について地球科学者との連携を深める方向での提言を出したい旨の提案がなされ，議論の後，提言の原案を中嶋委員が作り，それに賛同する研連・専門委員会委員が個人の立場で加わる形で提言を出すことになった．

6)　次回は11月20日（金）の予定．

また，高須研連委員より配布資料に基づき，6月5日に開催された第17期第3回鉱物研連の議事内容に関する次の報告が行われた．

1)　第17期鉱物研連の実践的な活動計画について：前回の鉱物研連で取り組むことになった各研究機関の現状と改組・改変に関するアンケートについて高須・河村・藤野各委員よりその内容の説明があり，それに対し追加項目の提案，アンケートの主旨についての議論が行われた．結論として，アンケートを各研究機関の便覧的な内容紹介と現状のまたは改組・改変に伴う問題点の2つの面について行うことになり，その具体的項目を再度前記の委員で行うこととなった．

2)　2006年IMAの日本での開催誘致について：時間がなく議論しなかった．

3)　次回は11月20日としたが，IMA誘致問題について急遽議論の必要が生じた場合には7月24日とすることとした．

(3) 鉱物学研連鉱床学専門委員会

石渡　明専門委員会委員より第17期第3回委員会に関する報告が提出された．議事内容については松枝大治会員（鉱床学専門委員会幹事）による記事がすでに地質学会ニュース1–7に掲載されているので省略する．

(4) 地球化学・宇宙化学研連

矢内桂三委員より第17期第2回委員会に関する報告が提出された．本委員会の議事内容については田中　剛会員により地質学会ニュース1–6に掲載されているので省略する．

(5) 海洋科学研連

報告なし

(6) 国際学術協力事業研連

土　隆一IGCP専門委員会委員長より4月17日に開催された第17期第2回委員会に関する次の報告が文書で寄せられた．

1)　DELP専門委員会をILP（International Lithosphere Program）専門委員会に名称変更したいとの件について検討し，手続きをすすめることとした．

2)　第18期に予定されている研連の見直しに向けて，本研連のあり方，あわせて日本の国際協力事業に関する研究体制のあり方を今後検討することとした．

3)　次回は9月18日（金）の予定．

(7) 古生物学研連

井本伸広研連委員より6月12日に開催された第17期第3回委員会に関する次の報告が文書で寄せられた（報告事項省略）．

1)　研連の見直しの動向については，当面第一常置委員会の動きを見守ることとなった．

2)　研連からの国際会議派遣候補者の推薦については，希望する委員は次回委員会に会議の概要や招聘状などを提出し，調整を行うこととなった．

3)　古生物タイプ標本のデータベース構築については，分類群ごとにタイプ標本のデータベースを整備することの意義や大学博物館構想との関連，散逸の恐れが危惧されるタイプ標本についての対応などについて議論が進められ，当面これまでの論議の経過や到達点などについて，池谷仙之研連委員長，小笠原憲四郎，平野弘道両幹事でとりまとめを行い，次回以降の論議に資することになった．

4)　その他，「国際動物命名規約」1985年版の改訂の進捗状況について情報交換がなされた．

(8) 第四紀研連

報告なし

(9) 地質科学総合研連

木村　学研連委員より配布資料に基づき，3月2日に開催された第17期第2回委員会に関する次の報告があった（審議事項のみ掲載）．

1)　水文地質・応用地質小委員会の継続設置と委員の補充について：第1常置委員会に申請したところ研連委員が小委員会メンバーに加わっていないことを理由に設置申請が保留となった．審議の結果，鎮西委員長が両小委員会に委員として加わることとなった．

2)　1名欠員の本研連委員について：上記両小委員会のどちらかの委員長をもって充てることとし，具体的な取り扱いにつ

いては鎮西・青木・斎藤の学術会議会員に一任することとした．

3） 地質科学総合研連の研究領域の明文化について：審議の結果，以下の成文案を原案とし，5月末までに修正意見があれば委員長に申し出，それを考慮して委員長の責任で提出することとした．

「地質科学全般．1．地球表層の構成物質および表層の諸過程，その歴史に関する研究領域（地質学，地形学，古生物学，岩石学，鉱物学，鉱床学，地球化学，水文学など），2．特定の時代を総合的に研究する領域あるいは地球外物質・宇宙空間に関する研究領域（第四紀学，宇宙化学など），3．これらの応用に関する研究領域）．」

4） 第17期研連の活動方針に関するアンケートに対する対応について：E-mailあるいはFaxで委員長宛に意見を申し出，委員長がそれをコンパイルして提出することとした．

5） 研連の見直し問題について：第一常置委員会に対する第4部からの回答（第4部長，平成9年4月23日）中に，第4部内の問題として数学，物理，化学の大型研連に対する地球科学，生物学関係研連の細分が指摘され，地球科学，生物学関係研連の大型研連化と専門委員会の形がよいと明記されている．さらに平成9年7月，第17期第1回第4部会において，和田部長は上記の第4部回答は第17期においても基本的方針として貫くことが表明された．

6） 地質科学関連学協会協議会について：自由討論を行った．第16期で検討された協議会は組織運営に主眼があり，各学協会の自主性に抵触する危惧があった．協議会で何をするかを優先させる必要がある．サイエンスの必然性としての共同行動，地学の普及，地学教育など．今後も引き続き議論することとした．

7） もう1名の本研連幹事として，池谷仙之氏を決定した．

8） 次回研連日程を平成10年6月11日とした．

(10) IGCP専門委員会

土　隆一委員長より6月12日に行われたIGCP専門委員会・小委員会合同会議（第17期第2回）に関する次の報告が文書で寄せられた．

1） 本年から新たに発足した2つのIGCPプロジェクトが紹介され，波田重熙氏と佐々恭二氏がそれぞれを代表する委員として今後活動されることとなった．IGCP-411東・南アジアにおけるゴンドワナランド起源テレーンのジオダイナミクス（1998-2002）（波田重熙）と，IGCP-425文化遺産と地すべり災害予測（1998-2002）．以上の結果，日本が参加しているプロジェクトは現在計11となる．

2）今年度の活動方針として，自然災害と防災に関連する2つのプロジェクトを中心にシンポジウムを開くことが検討され，9月までに具体化することとした．

3）「インパクトと地球外球粒（IGCP-384）」9論文，60pを印刷刊行し，関係方面に配布した．

4） IGCPプロジェクトと世界各国の参加状況一覧を作成し，検討した．参加国数は157，最も多くのプロジェクトに参加している国はフランス，ドイツ，米国でそれぞれ36となっている．

5） 次回は9月11日（金）の予定．

5.　各種委員会報告

(1) 科研費問題検討小委員会

八尾　昭委員長より，本評議員会で選出する「平成11年度科研費審査委員候補者」の候補者の検討を行った，との報告があった．（議題へ）

(2) The Island Arc編集委員会

徳橋秀一The Island Arc編集事務局長より配布資料に基づき次の報告があった．

1） 1998年第1回配本である合併号（Vol.7,Issue 1/2）の配本は，印刷会社を変えたことによる不慣れと300ページ近い大部であるという理由が重なって，当初の予定よりはかなり遅れて6月末になるという連絡がBlackwell Science社よりあった．

2） 6月初め現在の購読申し込みは361名である．当面の目標の500名に向かって，さらに購読者を拡大していく必要がある．今後の拡大の参考にするために，昨年の1月から今年の3月までの1年あまりのThe Island Arcに関する主な経緯や学会での取り組みをまとめた．

3） 地質学会会員以外の購読申し込みの取り扱いが当面の課題の一つで，学会事務局に検討を依頼中である．当面の暫定的対策として，非会員が振り込みで購入を希望する場合にはThe Island Arc事務局でも取り次ぎを行うことを可能とした（詳細はニュース誌，1-5参照）．

(3) 地質学普及教育実行委員会

高橋正樹委員長より次の報告があった．

5月31日（13：00～16：00）に普及教育実行委員会と地学教育研究委員会との合同会議を行った．出席者は計17名．両委員会の活動経過・現況の紹介のあと，自由討論の形で，小中高校での地学教育の現状と諸問題，教育系大学の現状と諸問題，地質学会としての今後の取り組みの方向が活発に意見交換された．今後の方向に関する主な議論・提案等の内容は，

(1) 小中での地学教育は全国的規模なので，それへの対応が非常に重要．

(2) 小中高を通じての一貫したカリキュラム（ミニマムエッセンシャル）を作ることが必要．一関連学会の間の協議の際にも重要なベースとなる．

(3) 普及教育に関して地質系関連学会（古生物学会，資源地質学会，地学教育学会など）との連携を図ることを考える必要がある．

(4) 地学系教員とともに非地学系教員（今後増加する可能性が大きい）に対する教育の具体的方策を考えることが必要．

(5) 個々の会員による市町村レベルでの“草の根運動”が重要．これまでも諸処で行われてきていると思われるが，地質学会として把握されていない．ニュース誌での紹介を通じて活動を拡げていくとともに，学会として把握していく必要がある．

(6) 古生物学会の「友の会」のようなものを考えてはどうか．天文学会の例も参考になる．

(7) 地質学会の会員のなかで初等中等教育関係の教員は900名前後の規模である．今後地質学会としてより組織的に，効果的に取り組んでいくためには，その活動の母体として「部会」を設けることが必要である．

(8) 地学関係の採用側（地質コンサルタント等）から初等中等教育に対する提言，要望を出すことは有意義ではないか．

(9) 新潟県教育長に対して提出したような教員採用に関する要望書は全国的に提出する必要がある．

上記諸点についてとくに一定の結論は出さず，地学教育研究委員会としては今回の討議内容を持ち帰って検討すること，再度合同会議を行うことが出席者により了承され，さらに本年9月の松本大会時の小中の地学教育に関する夜間小集会を両組織の共催で行うことが了承された．

(4) インターネット運営委員会

天野一男委員長より次の報告があった．

内規に従って下記の委員を選定し，ホームページを運営している．インターネット運営委員会委員一覧（担当，*は責任者））次のとおり．

委員長

天野一男（全体構成，地質学会とは*，科研費情報*）<kam@mito.ipc.ibaraki.ac.jp>

幹事

渡部直喜（全体構成*，英語版*，運営組織*）　<jibanken@cc.niigata-u.ac.jp>

委員

足立勝治（全体構成，研究助成金*）
<ka.adachi@ajiko.co.jp>

濱本拓志（新着情報*，研究室案内*）
<takuji@flower.gs.niigata-u.ac.jp>

Martin Andrew（英語版）
<martin@mito.ipc.ibaraki.ac.jp>

宮下由香里（地質学雑誌*，カレンダー*）
<yukari@gsj.go.jp>

水野篤行（事務局だより*）
<geosocjp@ra2.so-net.or.jp>

斎藤靖二（テクニカルアドバイザー）
<y-saito@kahakusv.kahaku.go.jp>

徳橋秀一（地質学雑誌，The Island Arc）

<toku@gsj.go.jp>
鳥海光弘（地質学雑誌，カレンダー，公募情報*）　<tori@geol.s.u-tokyo.ac.jp>
渡部芳夫（The Island Arc*）
<nabe@gsj.go.jp>
芳野　極（トピックス*，研究室紹介）
<yoshino@tsunami.geol.s.u-tokyo.ac.jp>

6.　外部関連委員会報告

(1) 学校科目「地学」関連学会協議会

水野篤行協議会委員より次の報告があった．

第13回協議会が4月21日（火）18：00～20：00に開催され，平社・水野両委員が出席した．主な議事内容は次の通りであった．

(1) 地学教育に関する関連学会間での情報交換システムについて：地学教育学会ホームページに関連学会のホームページをリンクさせる．それに各学会の紹介を掲載する方向で考えていく．具体的方法は，さらに検討する．

(2) 小林　学氏による「地学教育の歩み」の講演があった．最後に，同氏から，教育課程の改訂にあたっては本協議会における関連学会の意見集約は極めてパワフルであるとの発言があった．

(3) 次回（第14回）は6月23日（火）17：30～19：30．（地学教育における情報交換システムについて，協議会の今後の方向について，等）

(2) 自然史学会連合について

斎藤靖二自然史連合幹事より次の報告があった．

6月6日に国立科学博物館分館で幹事会が開かれ，会議とメールで議論されてきた以下の事項について確認がなされた．

(1) 臨時総会を7月11日（土）午後2時から国立科学博物館分館で開催する．議題は，活動報告，活動方針，科研費審査委員の推薦など．

(2) 学会連合庶務（日本哺乳類学会：遠藤秀紀）あてに，総会資料として各学会から科研費審査委員を推薦してもらう．締め切りは7月6日．

(3) 学会連合主催のシンポジウムを10月24日（土）13：00～17：00に国立科学博物館分館講堂で開催する．テーマは，「干潟の自然史」．

(4) 日本プランクトン学会の連合への参加が承認された．

(3) 地球惑星関連学会連絡会について

新妻信明前連絡会委員より次の報告があった．

1)　1998年合同大会について

1998年5月28日に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われ，下記の議事があった．

1.　開催中の合同大会には2,250人が参加（内，890人が事前登録），発表数は1,629件で98％が電子申込であった．プログラムの発送にあたって不手際があったが，発表申込の際の名簿を発送名簿に含めることは時間的に困難であり，今後検討することとした．従来はコンビーナーが対応したが，今回は不十分であった．地質学会会員へのプログラムは地質学会の対応が希望された．

2.　1999年の合同大会は北大が実行委員会を担当し，6月8日−11日に代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催することとした．開催に当たっては業者の導入も検討することとした．

3.　2000年の合同大会は九州大が実行委員会を担当し，6月21日−24日に開催すると共に，AGUの西太平洋WPGMを6月23−27日と，日程を重複連続して代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催することとした．

4.　WPGMの組織委員会は参加学会の会長によって組織することが提案され，各学会の了承を得ることが求められた．第1回の組織委員会は1999年の合同大会の際に開催することとした．

5.　幹事は測地学会の加藤照之氏から地震学会の坪井誠司氏に交代することとした．

6.　次回は，代々木，「青少年センター」で9月21日（月）13：30から開催することとした．

2)　1999年合同大会のセッション，シンポジウム提案の一般公募に関する連絡があった．

(4) 地球環境科学関連学会協議会について

新妻信明委員より1997年12月22日に開かれた第1回協議会について配布資料により次の報告があった．

20学会の参加をもって本協議会が発足することとなった．地質学会を含み出席の16学会より本協議会に関係するそれぞれの活動が報告され，地球環境科学に関する活動がそれぞれに取り組まれていることが認識された後，事業計画等が審議された．事業計画としては，シンポジウム・講演会の開催，専門書・一般書等の出版の企画，協議会ニュース，ホームページ，共同研究などへの取り組み，地球環境科学の初等・中等教育と一般への普及等が協議された．今後，協議会の開催頻度は年2回程度，その他はメール等での相互協議とすることとなった．

議　題

1.　**科研費配分に係る審査委員候補者の選出**

八尾　昭科研費問題検討小委員会委員長より候補者を選出する分科・細目（学会内留置を含む）ごとに同小委員会で検討・選出した複数の第1次候補者の名簿が提出され，説明があった後，投票が行われ，次の候補者が選出された．地球科学2段1名（学会内留置）徳岡隆夫，地質学1段1名（学会内留置）天野一男，層位古生物学1段1名　海保邦夫（補欠　松川正樹），地球化学1段1名　大場忠道，自然史科学1段1名（学会内留置）大野照文．

2.　1998**年度日本地質学会会計監査の選出**

小泉　格評議員会議長より標記について，三本健四郎（再任），長瀬和雄（新任）両会員を推薦したいとの提案があり，これを承認した．

3.　1998**年度日本地質学会各賞選考委員の選出**

標記について前年度の徳橋秀一，今年度の鳥海光弘両編集委員長を選考委員会委員とすることを確認した後，今年度評議員から8名を選出した．専門分野の上で大きく岩石系・構造地質系・層位堆積古生物系・応用地質環境地質系に分けて選出することとし，13名の候補者が推薦され，8名を連記投票の結果，得票の上位から，次の選考委員を選出・決定した．岩石系−吉田武義・丸山茂徳・板谷徹丸．構造地質系−天野一男・木村　学．層位堆積古生物系−八尾　昭．応用地質環境地質系−田崎和江・楡井　久．

4.　**地質学論集の新規刊行企画について**

久保和也第二庶務委員長より配布資料に基づいて標記についての提案があり，これを承認した．なお，財政問題との関係もあり，売れるものをつくって欲しいとの要望が出された．

標題：ジュラ紀付加体の起源と形成過程（Origin and tectonic evolution of Jurassic accretionary complexes in Japan）

概要：1997年秋の福岡大会において本テーマで行われたシンポジウムの講演内容及び討論の成果を中心として，今後少なくとも10年間にわたってジュラ紀付加体の研究の指針になるように，いくつかの総説を設ける．総ページ250p．の予定．

編集組織：木村克己（連絡責任者）・中江訓・小嶋　智・佐野好弘

予定：1999年6月中旬編集完了，同年8月末出版

費用概算：1,000部，105万円．

5.　**学術情報センター「電子図書館事業」への参加について**

天野一男第一庶務委員長より標記について配布資料に基づいて詳細に説明があった上，下記の提案が行われ，審議の上原案通り了承された．

執行委員会では，情報公開の原則に基づき，地質学雑誌，地質学論集，講演要旨等を対象として参加する方向で検討を進めてきたが，今後著作権使用料金，公開開始時期等の問題について学術情報センターからの詳しい事情の聴取を含めてさらに検討を行い，結論を出して最終的には本年度第3回定例評議員会で参加の承認を求めることとしたい．最終承認を得た後，申請の準備を進めるとともに，会員への広報を行い，参加の手続きに入りたい．本評議員会では第一段階として，地質学会と

してこの電子図書館事業に参加する方針を確認・承認して欲しい.

6. **預金口座振替による会費等の集金事務代行サービスの導入について**

足立勝治執行委員長（会計委員長代行）より標記について配布資料に基づいて下記原案の説明があり，審議の上，原案通り承認された.

日本地質学会ではこれまで会費の徴収を主に郵便振替による払込によって行ってきた. 今後, 入金管理に関する事務局の負担の軽減, 会員の定着率のアップ，資金管理の計画化, 会員にとっては振込のために金融機関へ出向くことの不必要等のメリットを考慮し，会費等の自動振込みを，併せて導入したい. 依頼会社は(株)三井ファイナンスサービス，導入費用は約14万円. 来年度分から実施することとし，承認されれば，ニュース誌上で，早急に会員に対して広報を進めたい. なお，現在ほとんどの会員が公共料金の口座引き落としをやっていると思われるので，できるだけ多くの会員がこのシステムを利用されるよう希望する.

7. **1998年度版会員名簿の記載事項について**

滝田良基会員委員長より配布資料に基づき，標記について下記の提案があった.

1) 名簿配列は50音順とする（従来は電話帳方式）. アルファベット表記は今回は見送り，次回（2000年）からは実現させる.
2) 出身大学・卒業年は掲載し，研究分野番号は掲載しない.
3) 所属：名称，電話番号，ファクス，電子メールアドレス（新規）を掲載する.
4) 自宅住所：連絡先と変更し，原則として会誌送付先を掲載する. 希望により，変更可.
5) 支部名：削除
6) 名誉会員一覧，賛助会員は従来通り.
7) 歴代会長・副会長，地質学会賞・国際賞受賞者の一覧を掲載する（新規).
8) 掲載事項変更は，松本大会時にも会場で受け付けるように用紙を配布する.

上記原案について審議の上，原案通り承認された. ただし，出身大学・卒業年については非掲載の希望があれば本人の申告に応じて掲載しないこととした.

8. **今年度の新委員会等の構成，審議の内容・進め方等について**

報告・審議に入る前に小松正幸会長から配布資料に基づき，5月15日付けで元会長有志（8名；連絡世話人：大森昌衛元会長）より現会長・評議員会議長宛に「学会運営についての要望書」，ならびに6月9日付けで藤田至則会員より評議員会宛に「評議員会（秋山・斎藤両会員による)回答に対する批判と要望」の文書が送付されたことと，それらの内容の紹介があった. 次いで，地質学会における今後の議論に向けて，同会長が整理した，1988年6月の評議員会以降，これまでの10年間を通じての将来構想等に関する評議員会，さまざまな委員会における討議経過・内容について，配布資料に基づいてレビューを行い，また近年におけるロンドン地質学会の運営改革の概要の紹介があった.（内容については，ニュース誌1–7に前者の詳細を掲載したので省略）

1) 各委員会の構成について

⑴ 足立勝治執行委員長より配布資料に基づいて会則・細則等検討小委員会，組織運営検討委員会，事業計画委員会の3委員会の，副会長と事務局長を含む構成メンバーの候補者に関する提案があった.

これに対して全体審議の前に，副会長・事務局長が委員として委員会に参加することに対して, 疑義が出された. 副会長・事務局長それぞれの役割，会則・運営細則との関係，各委員会の評議員会に対して原案を提出するという役割等を中心として，藤田会員の文書内容も踏まえて活発な討論が行われた. その結果，まず副会長が委員として参加すること，事務局長が事務局代表として委員として参加することを原案として採決することとした. 両者を個別的に挙手採決の結果，それぞれの原案を賛成多数で承認した.

⑵ 次いで，上記3委員会の構成メンバーに関する提案が原案通り下記のように了承された.

・会則・細則等検討小委員会　委員長：天野一男（第一庶務委員長）委員：佐々木和彦・徳橋秀一
・組織運営検討委員会　委員長：徳岡隆夫（副会長） 委員：新妻信明・佐々木和彦・加藤碩一・府川宗雄・水野篤行（事務局長）
・事業計画委員会　委員長：坂　幸恭（副会長） 委員：青木　滋・上砂正一・香村一夫・高橋正樹・籾倉克幹・湯浅真人・水野篤行(事務局長)

⑶ 財政問題検討委員会の構成メンバーについて,上砂正一会員より下記候補者が提案され，原案通り承認された. 委員長：上砂正一　委員：秋葉文雄・磯﨑行雄・嶋本利彦・久保和也・高橋正樹・吉田武義・水野篤行(事務局長)

⑷ 副会長・事務局長の委員会委員就任の問題を含む，藤田至則会員の評議員会宛文書への対応について討論され，結論として，評議員会として回答を行い，その内容については小泉　格評議員会議長に一任することとした.

2) 各委員会の任務（審議の内容・進め方等）について

⑴ 会則・運営細則等検討小委員会

天野一男委員長より下記の原案が説明され，審議の上，原案通り承認された.

1) 1997年度第4回定例評議員会において承認された会則・細則の変更について，文言・表現等細部を検討し文案を作成する.
2) 同上評議員会においてペンディングになった事項については，組織運営検討委員会の検討結果に基づいて，文言・表現等細部を検討し，文案を作成する.
3) 組織運営委員会と密接な連絡をとりながら作業を進める.
4) 検討にあたっては，会員の意見を広く聞く.

⑵ 組織運営検討委員会

徳岡隆夫委員長より配布資料に基づいて下記の原案が提案され，審議の上，原案通り承認された.

1) 任務：地質学会の組織運営に係る諸問題，とくに前年度の検討で残された課題を検討する.

⑴地質学雑誌の編集体制. ⑵支部のあり方. ⑶研究委員会のあり方. ⑷総会開催の時期. ⑸会長・副会長の被選挙者（院生を外す原案について). ⑹会長・副会長の評議員会での位置付け（評議員会の構成員として討論及び議決に参加の原案について). ⑺その他，学会の組織運営に関する課題の抽出・検討.

2) 進め方：任期は1年とする（1999年3月末まで). 必要に応じて支部の状況もリサーチするものとする. 本評議員会の後，ほぼ毎月委員会を開いて検討, 臨時評議員会への報告, 12月定例評議員会での中間答申を経て，来年3月の定例評議員会で最終答申を提出する.

⑶ 事業計画委員会

坂　委員長より配布資料に基づいて下記の原案が提案され，審議の上，原案通り承認された.

1) 任務：評議員会からの諮問に基づいて，日本地質学会が法人化するにあたっての問題点，法人化した場合の問題点を検討し，望ましい法人像を策定すること.
2) 活動方針：基本的には他の委員会，とくに組織運営検討委員会及び財政問題検討委員会における検討結果を勘案しつつ，次の通り法人像を策定する.

⑴ 法人学会および現在法人化を進めている他の学会の実情の把握を，対象とする学会を絞った上でさらに継続する.
⑵ 先の委員会で策定された定款（案）及び細則（案）を見直し，その大綱を作成する.
⑶「Q & A」あるいはそれに代わる広報を継続するとともに，会員からの意見聴取及び意見交換の機会を設ける.

3) 今後，原則として月1回の会合を

開催，9月臨時評議員会に報告，12月定例評議員会で中間答申，3月定例評議員会で最終答申を行う．1999年総会には評議員会報告の形で提示する．

(4) 財政問題検討委員会

上砂正一委員長より配布資料に基づいて6月5日に行われた委員会の報告があり，そこで確認された下記事項が提案され，審議の上，原案通り承認された．

1) 評議員からの委員を秋葉文雄・吉田武義両氏にお願いする．

2) 8月号のニュース誌に財政問題検討委員会の検討結果を報告し，同時にファクスアンケートを行う．

3) 9月の臨時評議員会で財政についての方針についての審議をお願いする．

4) 松本大会のポスターセッションで財政問題の検討結果を報告し，会員の意見を所定の用紙に記入してもらう．

5) 意見をまとめ11月号のニュース誌に掲載する．

6) 12月の定例評議員会に答申（案）を提出し，評議員会の意見をまとめた上，2月号ニュース誌に報告し，3月の定例評議員会で最終答申を行う．

9. 臨時評議員会の開催について

足立勝治執行委員長より，9月の松本大会の際に財政問題を主議題として臨時評議員会を開催したいと提案され，9月24日（木）14時から信州大学理学部会議室において開催することを決定した．

10. その他

1) 古生物学専門部会の設立について

平野弘道会員より提出された標記の申請について審議の上，規約案を評議員会に提案してもらい，評議員会でそれを承認した後に，次回総会に設立を議題として諮ることとした．

2) 第3回定例評議員会の開催日時・場所について足立勝治執行委員長より次のように提案され，承認された．

1998年12月19日（土）12：30から18：00　北とぴあ802会議室（執行委員会も同一会場）

出版物在庫案内

ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください．なお，2冊以上のお申込みにつきましては送料をお問合せください．現金書留または郵便振替　00140-8-28067

割引頒価：21号～39号　院生・学生4割引，それ以外の会員2割引，40号以降院生・学生のみ2割引

地質学論集

第21号　続・日本列島の基盤．加納　博ほか編，331 pp., 1982年4月刊，会員頒価2,400円，〒380円

第22号　琉球列島の地史．木崎甲子郎ほか編，165 pp., 1983年4月刊，会員頒価2,100円，〒310円

第26号　白亜系の国際対比—現状と問題．平野弘道編，172 pp., 1985年3月刊，会員頒価2,000円，〒310円

第30号　日本の第四紀層の層序区分とその国際対比．市原　実ほか編，221 pp., 1988年4月刊，会員頒価2,000円，〒340円

第31号　関東地方の基盤と変動．福田　理ほか編，138 pp., 1988年6月刊，会員頒価1,600円，〒310円

第33号　西南日本内帯高圧変成帯とテクトニクス．西村祐二郎ほか編，357 pp., 1989年4月刊，会員頒価3,000円，〒380円

第34号　堆積盆地と褶曲構造—形成機構とその実験的研究—．三梨　昂ほか編，209 pp., 1990年3月刊，会員頒価2,500円，〒340円

第37号　古日本海東縁の新第三系—層序・古地理・古環境．小林巌雄ほか編，326 pp., 1992年3月刊，会員頒価3,000円，〒340円

第38号　変動帯における砕屑岩類の組成と起源—日本列島を例として—．君波和雄ほか編，401 pp., 1992年3月刊，会員頒価3,500円，〒380円

第39号　続湖沼の成因と環境・地質．徳岡隆夫ほか編，189 pp., 1993年3月刊，会員頒価2,200円，〒310円

第40号　中央構造線のネオテクトニクス—その意義と問題点—．岡田篤正ほか編，250 pp., 1992年12月刊，会員頒価3,200円，〒340円

第41号　中部九州後期新生代の地溝．長谷義隆ほか編，192 pp., 1993年6月刊，会員頒価3,100円，〒310円

第42号　西南日本の地殻形成と改変．小松正幸ほか編，357 pp., 1993年4月刊，会員頒価3,100円，〒380円

第43号　浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学．村岡洋文ほか編，177 pp., 1994年4月刊，会員頒価2,000円，〒340円

第44号　島弧火山岩の時空変遷．周藤賢治ほか編，335 pp., 1995年11月刊，会員頒価2,800円，〒380円

第45号　シーケンス層序学—新しい地層観を目指して．斎藤文紀ほか編，249 pp., 1995年8月刊，会員頒価2,500円，〒340円

第46号　火山活動のモデル化．佐藤博明ほか編，162 pp., 1996年9月刊，会員頒価1,900円，〒310円

第47号　日高地殻—マントル系のマグマ活動．荒井章司ほか編，323 pp., 1997年4月刊，会員頒価3,000円，〒380円

第48号　Cretaceous Environmental Change in East and South Asia (IGCP 350) Contributions from Japan—　岡田博有ほか編，188 pp., 1997年6月刊，会員頒価2,100円，〒340円

第49号　21世紀を担う地質学．新妻信明ほか編，232 pp., 1998年3月刊，会員頒価2,500円，〒340円

第50号　構造地質　特別号—21世紀の構造地質学にむけて—．狩野謙一ほか編，263 pp., 1998年7月刊，会員頒価2,500円，〒380円

第51号　地震と地盤災害—1995年兵庫県南部地震の教訓—．岡田博有ほか編，162 pp., 1998年3月刊，会員頒価3,000円，〒340円

討論会講演要旨（1979年4月刊，東京四谷）会員頒価700円，〒340円

第92年学術大会講演要旨（1985年3月刊，山口）会員頒価3,200円，〒500円

第96年学術大会講演要旨（1989年5月刊，茨城）会員頒価3,500円，〒500円

第101年総会・討論会講演要旨（1994年3月刊，東京）会員頒価1,500円，〒400円

第103年学術大会講演要旨（1996年4月刊，仙台）会員頒価3,500円，〒500円

日本の地質学100年（100周年記念誌，1993年3月刊）頒価8,000円，〒600円

第104年総会講演要旨（1997年4月刊，東京）会員頒価700円，〒300円

日本地質学会元会長有志の「学会運営についての要望書」と，藤田至則会員の「評議員会（秋山・斎藤両会員による）回答に対する批判と要望」と，回答

日本地質学会会長　　小松正幸殿
日本地質学会評議員会議長
小泉　格殿

学会運営についての要望書

私どもは正副会長をはじめ評議員会のかたがたが，日本地質学会の活性化に努力しておられる労を多とし，その成果を期待しております．改めて申すまでもなく現在の日本が変動期にあり，地質学会もまた変動する社会への対応を迫られていることは確かです．

歴史的にみますと，学問の世界は政治や経済の世界とは異なり，その変革には科学的思考の成熟がともなわねばなりません．そのため学会の改革には，関連研究者の衆知を集めながら慎重に対応することが望まれます．その意味で，現在の学会執行部がやや活性化の追求に性急過ぎるきらいのあることを憂慮します．

日本地質学会News Vol. 1. No. 2（1998年2月号）に植村　武会員が紹介している「ロンドン地質学会の動向」によれば，1992年6月に同学会の特別総会で提起された会則改正は，1999年10月までに報告をまとめる目標で，たびたび特別総会を開いて討議を重ねているとのことです．日本地質学会においても，現在の変動期のなかから来世紀に向けての展望ある改革を実現するためには，戦後半世紀の学会活動の成果や反省をふまえて，会員の衆知を傾けた慎重な対応が望まれます．

執行部が各種委員会を設けて熱心に討議を重ねている内容は，地質学雑誌や日本地質学会Newsの学会記事欄で報告されていますが，会員がそれに対する意見を提起するまえに，執行部の結論が先行している感があります．重要な問題については，広く会員の意見を求めるためロンドン地質学会のように，特別の討論会を重ねるなどの配慮が望まれます．

また執行部の学会運営にたいして，会員の間に非公式の批判文書が配布されることは決して望ましいことではありません．評議員会や執行委員会はこのような批判文書が配布されている事態に目を向けて，会則改正を要するような重要な案件についてはその意義を解説し，広く会員の意見を求めた上で慎重に審議するような配慮を希望します．

評議員会の意のあるところが会員の支持を得て，円滑に日本地質学会の活性化を実現し，新しい世紀に向けて悔いることのない改革をもたらすことを切望いたします．

1998年5月15日

日本地質学会元会長有志
池辺　穣，市川浩一郎，植村　武，大森昌衛*，黒田吉益，杉山隆二，野沢　保，端山好和
（アイウエオ順，*印は連絡世話人）

日本地質学会元会長有志
池辺　穣，市川浩一郎，植村　武，
大森昌衛，黒田吉益，杉山隆二，
野沢　保，端山好和　殿

前　略

1998年6月20日（土）開催の1998年度第2回定例評議員会において皆様からの「学会運営についての要望書」が，小松正幸会長から紹介されました．

重要な案件の処理は，慎重に審議するようにとのご配慮をいただきまして，誠に有り難う御座います．

皆様からの要望書を地質学会News誌9月号に掲載し，会員に広く紹介させていただきます．

執行部や評議員会における審議事項とその内容は，News誌の学会記事欄に逐次報告しておりますので，率直なご意見をお寄せいただければ，幸甚です．

先輩諸氏の暖かいご支援のもとに，新しい世紀に向けての日本地質学会の活性化を実現するために，一層奮起する所存ですので，よろしくお願いいたします．

敬　具

1998年9月1日

日本地質学会会長　　小松正幸
日本地質学会評議員会議長　小泉　格

1998年度日本地質学会評議員会様

評議員会（秋山・斎藤両会員による）回答に対する批判と要望

1998年3月の評議員会に対する，私の要望に対して，評議員会を代表して，秋山・斎藤両会員の回答が学会News, Vol. 1, No. 4に掲載されました．その内容には，誤った証言，誤った解釈が多く含まれていますので，改めて評議員会に対して抗議・批判，要望を致します．また，3月の評議員会において，秋山会長が評議員の資格もないのに，評議員会に対して，私への回答をしたい旨を提案するといった会則違反を犯し，しかも評議員会がそれを正式決定するという考えられないような処置をされました．この問題については，今回は指摘だけをして，その批判は後日にゆだねることに致します．私に対する回答は前回と同じように学会News誌上でお願いします．

1.　**設問：1に対する回答には，虚偽の証言が含まれており，会務処理の欠陥を含んでいますのであわせて批判致します．**

①　1995年6月の評議員会が「基本的に法人化の方向をとることを決定した」ことに関する私の指摘に対する回答によれば，**「その決定は，1995年12月の評議員会で，正確な表現に修正され，1996年4月の総会に提出し，承認された」**と述べています．ところが，1995年12月の評議員会の議事録（地質雑．102巻，5号，468-477頁，1996）には，**そのような記事は全く見あたりません．**ですから，それは虚偽の証言と言わざるを得ません．

②　1996年4月の総会で，法人化決定に対する会員の批判をうけて，議長が「法人化への道は場合によっては引き返すことができるような道である」といった意味の発言をして，法人化の方向をとることの決定をはっきり「否定」しました．ところが，4月総会の議事録（地質雑．102巻，7号，656頁）には，「基本的に法人化するという前提のもとに検討を進める」という記述があるだけで，上記の議長発言は全く記録されていません．しかも，議事録の文章は，「法人化することを前提にして法人化を検討する」という意味ですから，1995年6月の評議員会決定の本質的な修正になっていません．

③　上記のように，総会議事録には，1995年6月の評議員会決定を修正した議事録が欠落しているのです．そこで，これをごまかすためにか，地質雑．102巻，4号，372頁（1996）の事業計画委員会の議事録をもちだして，1996年総会が，1995年6月評議員会の決定を修正したと，私に回答しています．それは総会の議事録といえないことは言うまでもありません．

学会の事務的な手続きとしては，本来容認できない重大なミスです．この事務上のミスの責任はだれにあるのでしょうか．

④　以上のように1996年4月総会で，1995年6月の評議員会の誤った決定を否定したとしても，1995年6月から1996年3月までの学会活動の期間に，評議員会の間違った決定が有効に働いたという事実は隠しようがありま

せん．学会史の汚点として残されるのではないでしょうか．たとえば，1995年8月15日に，岡田会長が名誉会員全員に「評議員会は法人化の方向を決めました．」と報告したり，また，1996年2月に，事業計画委員会が法人化を前提にしたような文書を，全会員に配布したことなどは，評議員会決定が生きていたことをしめしています．これらの事実についてのきちんとした回答をお願いしたいと思います．

2.　**設問：3に関する回答についての批判**

私に対する回答は，「会長・副会長が，各種委員会の委員長になってはいけないという会則がないから，会長や副会長が委員長になっても会則違反にはならない」というものでした．会長をはじめ学会の主要メンバーが，上記の程度の回答しかできない原因は，多分，学会における会長・副会長の任務と，評議員のそれとが本質的に異質であることを理解できないところにあるのではないでしょうか．両者の差異はつぎのような点から見ても明らかです．

その一つの証拠として，会長・副会長の選挙は，同時に施行されていますが，たがいに異質の選挙法が適用されているということをあげることができます．

つまり，会長・副会長の選出は，全会員を見渡して，学識も深く，学界や実業界の経験の豊かな候補を全国的な視野で選んだうえ，一律に選挙するわけですが，評議員のそれは，学会における実務を担当する有能な会員を，職務別分野の定数を設けたうえで，それぞれ選挙で選出しています．要するに全く別な人格グループを選んでいるわけです．

一方，会則による会長と副会長の職務規程は，ともに，学会の代表者（またはその代理）とされ，同時に，ともに，学会の会務の総括者として規定されています．他方，評議員は総会で定めた基本方針にしたがい，運営要項を議決することが任務で，両者はこの意味でも全く異質の任務を与えられているわけです．

とくに，会長・副会長の会務の総括の任務は，評議員会の動向・その統一・発展の舵取り役的な重要を含み，こうした役職を与えられているが故に，評議員の資格を持たないにもかかわらず，評議員会に出席して，大いに発言し，討議に参加し，評議員会の発展方向への助言をするといった指導性が期待されているのです．

さきの私に対する評議員会の回答にあるように，会長・副会長に評議員会の各種委員会長役を与えて，評議員会並みの仕事をすることを期待することは，かえって会長・副会長の活動にブレーキをかけ，学会活動の足を引っ張ることになります．要するに評議員会の主なメンバーの意識は，会長・副会長・評議員のそれぞれに与えられた質の異なる任務の遂行よりも，彼らなりに重要と考えた委員会の任務の実務をいかにテキパキと，早く処理するかが，会長・副会長の任務と錯覚しているが故に，会長・副会長の任務である会務の総括の仕事が手抜きされ，評議員会の決定が押しつけの態をなし，会員からの不満が生まれるという事態をまねいていることを知るべきです．

なお，参考までに，選挙法に関して，次のような補足的な私見を付け加えたいと思います．つまり，会長・副会長を，あくまで評議員にしたいのであれば，評議員だけの選挙法に変え，そのあとで評議員の中から互選で，会長・副会長を選挙する方法もありましょう．しかし，こうした間接的な，少数による選挙では，相対的にすぐれた会長・副会長は生まれないと思います．やはり，全会員の中から，全会員が選んでこそ，相対的にすぐれた会長・副会長の出現が期待されるように思います．この意味で現在の選挙は民主的なものといえましょう．

3.　**設問：4の事務局長の会則（細則）違反に関する回答への批判**

細則によって，事務局長（書記）の任務は，「執行委員会の指示に従い，各常置委員会の事務に従事する」と規定されていますから，事務局長が学会の常置委員会以外の仕事に従事することは，細則違反と考えるのがまともな解釈ではないでしょうか？．ついで，事務局長も含む3名の書記は，学会事務の専門家として雇用されているのであり，事務局長が本来の事務局の仕事でもない，学会運営の仕事に参加することは，本来の雇用の契約を無視した不法行為とみることができるのであって，許されないことであると思います．

ところが，評議員会（秋山・斎藤両会員）は，私への回答の中で，何の理由も示さずに，常置委員会以外の委員会の委員に任命されても細則違反でないとして，事務局長を弁護しています．前記の「会長・副会長が，各種委員会の委員や委員長になってはいけないという会則がないから，なってもよい」という非常識な論法を頭に画いて事務局長の免罪を考えているとすれば，それは，会長・委員長の免罪よりはるかに困難といわなくてはなりません．

学会では，事務局長には，一般に，学識・経験の豊かな人材が当てられるということと，事務局には学会運営上有効な情報が集まりやすいということからして，事務局長が学会運営に加わることは，委員会にプラスもあるとみられる一方で，事務局長に学会運営のリーダーシップが奪われる可能性も考えられます．評議員会の私への回答にあるような，常置委員会以外の委員に事務局長を自由に就任させるという方針は好ましくないばかりか，避けなければならないことと考えます．

私は，今回のような事務局長の会則違反の責任は，むしろ，これを奨励した会長・副会長や評議員会の一部にあると考えます．猛省を促したいと思います．

1998年6月9日

関東支部　藤田至則

藤田至則　殿

前　略

1998年度日本地質学会評議員会あてに，1998年6月11日付けで送付されました「評議員会（秋山・斎藤両会員による）回答に対する批判と要望」は，1998年6月20日（土）に開催されました1998年度第2回定例評議員会において，その内容が詳しく紹介されました．

第2回定例評議員会において，本年度の委員会のうち，「組織運営検討委員会」と「事業計画委員会」の委員構成の原案が，執行委員会から提案されました．両委員会には副会長と事務局長が委員として含まれておりましたので，貴殿の文書内容を踏まえて，1）副会長・事務局長それぞれの役割，2）会則・運営細則との関係，3）各委員会での審議結果（原案）を評議員会に提出するという委員会の役割等を，慎重且つ活発に審議しました．そしてその後に，両委員会について，副会長が委員として参加することの可否，事務局長が委員として参加することの可否を，個別に挙手採決をしました．その結果，賛成多数で執行委員会原案を承認することになりました．

副会長・事務局長はその本来の役割を全うすることは勿論です．さらに，副会長にあっては，深い学識と学界での豊かな経験を，日本地質学会の活性化に役立てていただくために，事務局長にあっては，事務局を代表して審議事項の内容などを間違いなく会員の皆様にお届けするために，委員として参加していただくことを確認いたしました．

今後も各委員会において検討していただいた原案は，逐次評議員会に提出され，改めて審議し，必要事項については評決していただくことになります．

執行委員会や評議員会における審議事項とその内容は，News誌の学会記事欄にその都度報告しておりますので，率直なご意見をお寄せいただければ幸甚です．

会員の皆さまの暖かいご支援とご理解のもとに，新しい世紀に向けての日本地質学会の活性化を実現するために，一層奮起する所存ですので，ご協力を切にお願いいたします．

草　々

1998年9月1日

日本地質学会評議員会議長　小泉　格

追　悼

渡辺文平さんを悼む

本学会会員，渡辺文平さんは1998年2月15日，脳出血のため逝去されました．あと，半月ほどで86才になられるところでした．

渡辺さんは明治45年（1912年）3月に岐阜県可児郡御嵩町（旧上之郷村ーアネクテンス象の模式産地）でお生まれになり，名古屋中学校，名古屋高等理工科学校電気科を卒業され，会社勤務を経て，戦後郷里の近くで教職の道に入られました．土岐郡明世村立明世中学校（当時）をはじめ，日吉中，泉中，瑞浪中，肥田中などで理科教員として後進の教育にあたられました．昭和43年（1968年）退職され，その後，名古屋市にある私立黄花学園高校へ講師として勤務されていました．

渡辺さんの地質学への貢献の最大のものは，地域において地層・化石の調査・研究を地道に進められたことでした．とくに大型有孔虫，*Miogypsina*を日吉村宿洞（現瑞浪市日吉町）で発見され，標本を当時の東北帝国大学の矢部長克教授へ送られました．このことは早速，矢部教授によって，学会に報告されました（Yabe, H., 1935, New Find of *Miogypsina* in the Tertiary of Mino. *Proc. Imp. Acad. Tokyo*, 11(4), 144–145）．これはこの地域からの大型有孔虫の最初の記録でした．その後，渡辺さんはこの地域の地質・化石についていくつかの報告・記録をまとめられています．

これからのことは，私事になって恐縮ですが，東海化石研究会の前身，東海化石趣味の会の名誉会員であった渡辺さんと知り合ったいきさつ，その後の交流について述べさせていただきます．

昭和34年（1934年）春，当時私は岐阜市明徳小学校で教員をしていましたが，名和昆虫研究所長の故名和正雄先生がモンキー友の会の幹事に私を推薦されました．モンキー友の会は犬山市にあったモンキーセンターが中心になって組織していた会で，自然観察を行っていました．会長は故宮地伝三郎先生で，井波一雄先生，鈴木基治先生を初め，多くの方々が自由に参加されていました．毎月一回，犬山，谷汲山，赤坂，篠島，蒲郡などで，昆虫採集，植物採集，探鳥会など，東海地方の小中学生を中心にいろいろの行事を行っていました．

冬には化石の研究会をやり，赤坂では早野　保先生，瑞浪では渡辺文平先生を講師にお願いいたしました．昭和35年に瑞浪市日吉，36年には同　山野内，37年には同　狭間でやり，渡辺さんからお話を伺ったことを覚えています．

昭和43年（1967年）5月，故西沢　勇氏（当時中日新聞社常務），鎌田正志氏（当時中日スポーツ報道部長），岩島幾芳氏（ジュエリー岩島），故吉田新二氏（当時愛知教育大学教授），藤　正彦氏（当時東海中学校教諭）などの会合で，名古屋で化石の展示会をする計画が持ち上がり，8月に名古屋市の丸栄百貨店でデスモスチルスの化石を展示することになりました．そして，この展示会を通じて，化石研究会を作ることを呼びかけたところ，百余名の参加希望者があり，11月2日の，第一回の会合には23名の参加者がありました．会名を「東海化石趣味の会」とし，会長に西沢　勇氏，副会長に江崎秀一氏と田中　穣氏をお願いして，発足しました．これが今も続いている「東海化石の会」です．

私はその第一回から参加していて，知人で化石に興味を持っている人を誘い入れることになり，大垣市赤坂の早野　保先生，瑞浪市の渡辺文平先生，犬山市の岡田先生，多治見市の西本博行先生，岐阜大学の故牛丸周太郎先生などの方々に講師をお願いしました．渡辺文平さんは昭和45年頃から3年間ほど，毎月一回の会合に熱心に参加して下さいました．何回か地質や化石についての講話をお願いしたことを記憶しています．

渡辺先生は地元である瑞浪地方の地質や化石を研究されていて，その姿勢には頭が下がる思いがします．反面，自尊心が高く，多少頑固で，一言居士的な風格をもっておられました．

帰宅の終バスの時間の関係で，午後の集会に参加されても，早めに帰られるので，夜にも会合がある運営委員などになっていただくことはできませんでした．

昭和48年頃だったと思いますが，数人の役員だけの席で「私立高校にでも勤めるところはないだろうか」とのお話があり，名古屋市内でもよい，ということだったので，中日新聞の西沢　勇氏にお願いして，実現し，しばらく通勤されました．

渡辺文平さんは地道に，自ら信じる道を歩まれ，一生を終えられました．心からご冥福をお祈りする次第です．

ご遺族渡辺志げ様（奥様)のご住所は下記のとおりです．

〒509–6251　瑞浪市日吉町4106–2　電話　0572–68–2527

（東海化石研究会会長　纐纈二三雄）

CALENDAR

1998, 9〜

地球科学分野に関係する研究会，学会，国際会議などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内いたします．会員の皆さまの情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会主催行事．

9月 September

○堆積学研究会秋の例会「堆積環境と堆積過程に関する講演会」
24日（木） 場所：信州大学理学部第一講義室 （信州大学公文富士夫 電話 0263-37-2479 Fax 0263-37-2506）
☆日本地質学会第105年年会（松本大会）
25日（金）〜27日（日） 信州大学
○環境科学会1998年年会
30日（水）〜10月2日（金） 場所：工業技術院筑波研究センター共用講堂 問い合わせ：社団法人 環境科学会年会委員会 電話 0298-58-6120

10月 October

○日本粘土学会1998年度例会 第42回粘土科学討論会
6日（火）〜8日（木） 場所：桐生市市民会館（群馬大学工学部 大谷朝男 電話 0277-30-1350）
○第24回リモートセンシングシンポジウム
8日（木）〜9日（金） 主催：計測自動制御学会 企画：リモートセンシング部会 場所：通信総合研究所大会議室（小金井市）問い合わせ：通信総合研究所 佐竹 誠 電話 0423-27-4121
○1998年度日本地球化学会年会
9日（金）〜11日（日） 場所：九州大学箱崎キャンパス 問い合わせ：九州大学理学部地球惑星科学科 村江達士 福岡市東区箱崎6-10-1 電話 092-642-2660 Fax：092-642-2684 E-mail：murae@geo.kyushu-u.ac.jp
○第17回日本自然災害学会学術講演会
15日（木）〜16日（金） 場所：金沢大学工学部秀峯会館
○第35回自然災害科学総合シンポジウムおよびオープンフォーラム「福井地震から50年 都市直下型地震災害を考える」
17日（土） 場所：金沢大学工学部秀峯会館（金沢大学工学部土木建設工学科 実行委員会幹事 宮島昌克 電話 076-234-4656, Fax 076-234-4644
E-mail：miyajima@t.kanazawa-u.ac.jp）
○日本地下水学会平成10年度秋季講演会
16日（金）〜18日（日） 場所：富山県民会館
シンポジウム「富山の地下水と人のくらし」
17日（土）場所：富山県民会館（日本地下水学会事務局 〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16 立正大学地理学教室内 電話 & Fax：03-5496-2084 e-mail:jagh@risgw3.ris.ac.jp）
☆日本地質学会環境地質研究委員会国際シンポジウム「環境保全と鉱物資源の活用」
25日（日）〜30日（金） 場所：新宿ワシントンホテル（詳細は6，7月号ニュース誌参照）
○日本地震学会秋季大会
26日（月）〜28日（水） 場所：福井市フェニックスプラザ （東京大学地震研究所 森田裕一 電話 03-3818-5089）
○日本地熱学会20周年記念シンポジウム「新地熱発電所と今後の地熱開発」
27日（火） 場所：早稲田大学国際会議場
○日本地熱学会平成10年大会
28日（水）〜29日（木） 場所：早稲田大学国際会議場 （日本地熱学会事務局 〒113-0034 東京都文京区湯島2-16-16 電話 03-5689-3471, Fax 03-3812-7737）
○日本応用地質学会 「応用地質計測」講習会
講習会日時および場所連絡先 *平成10年10月30日（金）* 札幌サンプラザ（札幌市北区北24条）北海道開発コンサルタント（株）地質部（富岡 敬）宛 電話011-801-1570 Fax 011-801-1571 *平成10年11月20日（金）* 婦人会館（仙台市青葉区錦町）応用地質（株）東北支社内（前田伴典）宛 電話 022-237-0471 Fax 022-283-1801 *平成10年12月3日（木）* 東方2001（広島市東区光町）復建調査設計（株）地質調査部（西尾喬夫）宛 電話082-506-1833 Fax 082-286-5215 *平成10年12月3日（木）*（財）福岡教育会館（福岡市東区馬出）日本工営（株）福岡支店内（川瀬浩之）宛 電話092-475-7565 Fax 092-475-7089

11月 November

○平成9年度地方自治体活断層調査報告会
4日（水）〜5日（木） 場所：千代田区大手町JAビル8階JAホール （（財）地震予知総合研究振興会 地震調査研究センター 活断層報告会係 電話 03-3295-1501 Fax 03-3295-1507）
○国際シンポジウム『琉球列島（南西諸島）—島嶼型動物相の適応放散と絶滅の舞台—』
5日（木）〜7日（土） 主催：鹿児島大学 鹿児島大学稲盛会館（鹿児島大学 大塚裕之 電話 099-285-8135）
○日産財団 知の独演シンポジウム—水惑星地球の未来-1
10日（火） 場所：東京神田学士会館 問い合わせ：（財）日産科学振興財団 電話03-3543-5597（詳細は本号）
○第14回ゼオライト研究発表会
12日（木）〜13日（金） 場所：上智大学図書館会議室 （東京工業大学理学部 小池隆之 電話 03-5734-2758）
○第15回東海地震防災セミナー1998
16日（月） 場所：静岡県商工会議所 5階ホール（土研究事務所 電話 054-238-3240）
☆日本地質学会環境地質研究委員会第8回環境地質学シンポジウム
28日（土）〜29日（日） 場所：大阪市立大学法学部棟
○「都市地震防災地盤図」に関するシンポジウム—深部地盤構造の重要性—
30日（月） 主催：日本応用地質学会 場所：中央大学駿河台記念館281号（詳細は本号）

12月 December

○教科「理科」関連学会協議会 第3回シンポジウム「これからの理科教育に求めるもの」
12日（土） 場所：日本化学会（東京都千代田区）お問い合わせ：間々田和彦（筑波大学附属盲学校）まで〒112-8684 東京都文京区目白台3-27-6筑波大学附属盲学校内 電話 03-3943-5421, Fax：03-3943-5410（詳細は本号）

1月 January 1999

○日本古生物学会1999年年会
29日（金）〜31日（日） 場所：東北大学（横浜国立大学間嶋隆一 電話045-33-9334）

3月 March

☆日本地質学会第106年総会
26日（金）〜27日（土） 場所：早稲田大学

6月 June

○地球惑星科学関連学会1999年度合同大会
8日（火）〜11日（金） 場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

10月 October

☆日本地質学会第106年年会
9日（土）〜11日（月） 場所：名古屋大学
○第7回太平洋地域新第三系国際会議
3日（日）〜6日（水） The 7th International Congress on Pacific Neogene Stratigraphy 場所：国立メキシコ大学 主催：RCPNS（太平洋地域新第三系層序委員会） 連絡先：Prof. A. Molina-Cruz, Organizing Committee of VII-RCPNS, Inst. Cien. Mar. Lim., UNAM, Ap. Post. 70-305, Ciudad Universitaria, Mexico D.F. 04510 Fax：52-5-6160748 国内連絡先：〒422-8035 静岡市宮竹1-9-24 土研究事務所 土 隆一 電話 054-238-3240 Fax 054-238-3241 e-mail：vyz01052@nifty-serve.or.jp 会議前後にExcursionを計画，First Circularは10月に発送される予定．

The Island Arcだより

先般Blackwell Science社から，来年1999年（Vol. 8）の地質学会員購読料が本年度と同額に据え置かれるとの連絡がありました．最近の円安もあり一抹の危惧がありましたが，さしあたりは値上げの方向が回避されて幸いでした．

Vol. 8の年間総ページ数は今年と同じ600ページですが，実質的には以下の事情で540ページ程度に減少します．今年Vol. 7では，大型の特集号が2編出版された影響で，Issue 3の出版時点で印刷総ページが600ページを越えることになりました．本来の出版契約ではこれ以上の印刷ページを使うことができないため，Issue 4のページが確保できないことになります．この原因は，年間出版計画策定に際して印刷会社から通知されたIssue 3の特集号の印刷ページ数見積もりがタイプセット時に誤っていたことが大きな原因であり，Issue 4に確保されると見込んだ60ページが実際のIssue3原稿入稿時に使い尽くされてしまいました．Issue 4には通常の単独論文の掲載を予定していましたので，なんとか単独のIssueとして予定通り出版するべく，可能な手段をBlackwell Science社側と協議し，最終的には来年1999年出版ページから前借りする形でIssue 4のための60ページを確保しました．この件についてIssue 3の特集号編集者の皆様にはご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます．

来年のVol. 8も，出版形態は季刊4冊となっていますが，受理論文の迅速な掲載出版，そして数多くの特集号の企画に対応するためには，出版頻度を隔月（年6 Issue）程度に増やすことも選択肢の一つでしょう．事務局が感じるところでは，最近の投稿論文数や受理論文の印刷待ち時間から考えて年間6冊は不可能ではないと感じています．ただし，年間総ページ数を据え置いても郵送料の増加は必然的に生じますので，今後慎重に検討を行う必要があるでしょう．会員購読者の皆様のご意見もお待ちします．

すでに年間出版ページを圧迫する大型特集号の取り扱いについては種々ご意見を頂き，編集委員会でも検討を重ねてきました．先にお知らせしましたとおり，出版計画上は年間2つの特集号を上限としています．従いまして，特集企画を担当編集委員長の承認のもとで編集されておられても，完成受理時に直近のIssue に掲載されるかどうかはその時点での印刷待ち特集号原稿の存否によります．出版をお急ぎの場合には，構成論文を単独論文として掲載することが可能かどうかご検討いただく場合もありますのでお含み置き下さい．また，編集委員長の承認する特別の事情がない限り，1編の特集号は刷り上がり150ページを上限としています．さらに，特集号であっても構成論文の個々の刷り上がりページ数上限を15ページとする規定は単独論文と同様です．上限を越えるときは，いずれの場合でも論文著者あるいは特集編集者にページチャージをお支払い頂くことになりますので，ご注意下さい．

なお，論文の投稿や雑誌の編集上のことでお聞きになりたいときは編集委員長まで，その他のいろいろな問い合わせ・ご意見・苦情等につきましては，気軽に編集事務局長までお知らせください．出張等で長期不在の場合もありますので，後者の場合は，宛先を連名でお送りくだされば幸いです．

The Island Arc編集委員長
小川勇二郎（筑波大学，電話 0298–53–4307, Fax : 51–9764,
E–mail : yogawa@arsia.geo.tsukuba.ac.jp）
巽　好幸（京都大学，電話 0977–22–0713, Fax : 22–0965,
E–mail : tatsumi@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp）

The Island Arc編集事務局長
徳橋秀一（地質調査所，電話 0298–54–3676, Fax : 54–3666,
E–mail : toku@gsj.go.jp）
渡部芳夫（地質調査所，電話 0298–54–3677, Fax : 54–3666,
E–mail : nabe@gsj.go.jp）

1999年（Vol. 8）からのThe Island Arc新規購読希望者募集中！

来年1999年（Vol. 8）からのThe Island Arcの新規購読希望者を募集しています．来年の購読料は，今年の購読料と同じで，正会員・名誉会員が8,000円，学生会員・院生会員が6,000円です．まだ購読されていない方は，是非この機会に購読を申し込まれることをお薦めします．The Island Arcの一層の発展と財政基盤強化のために，また，今後The Island Arcに積極的に投稿していただくために，より多くの皆様の積極的なご購読をお願い申し上げます．

新しく購読を申し込まれる方は，本ニュース誌に綴じ込みの「The Island Arc新規購読申込・変更届け出用紙」をお使いください．購読料は，年末に皆様にお送りします会費請求のときに一緒に請求致します（なお，学会会費の自動振り込みの手続きをされた場合は，会費といっしょに差し引かれることになります）．会費請求作業との関係で，同用紙を10月末までに学会事務局宛お送りいただけると助かります．この作業に間に合わなかった場合は，別途，郵便局の振り替え用紙で，払い込み内容明記の上，「日本地質学会　00140–8–28067」までお支払いいただくことになります．

なお，現在既に購読されていて，1999年も引続き購読され，他に特に変更がない場合は，この用紙をお送りいただく必要はありません．自動的に購読継続になります．なお，送付先の住所変更など，何か変更がある方は，同用紙を早急に学会事務局までお送りください．

＜日本地質学会会員用（購読者番号：　　）＞

The Island Arc

新規購読申込・変更届け出用紙

現在購読中で，'99年も引続き購読され，変更のない人は提出する必要はありません！

次の１，２のいずれかに○をつけてください．

1. The Island Arc [1999年Vol.8～] を新規購読します．

[年間購読料] 正会員・名誉会員：8,000 円，学生会員・院生会員：6,000 円

購読料は，年末の学会の会費の請求といっしょに行いますので，そのときにお支払いください！

（なお，学会会費の自動振込手続きをされた場合は，会費といっしょに差し引かれます．また，学会の会費請求時に間に合わなかった場合は，別途，郵便局の振り替え用紙で，払い込み内容明記の上，「日本地質学会 00140-8-28067」までお支払いください）

2. 次の変更を届けます．

＜変更内容＞（該当するものに○をつけてください．既に届けてある場合は必要ありません．）

A. 送付先，B. 氏名（旧氏名：　　）

C. 購読中止（その理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

＜記入欄＞

（記入年月日：＿＿＿年＿＿月＿＿日）

1，2いずれの場合も，下記にご記入ください．変更がある場合は，変更後の内容をご記入ください．

氏　名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

所　属：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

所属先住所：〒＿＿＿＿＿＿（７桁番号，機関独自の番号がある場合はその番号）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

TEL. ＿＿＿＿＿＿ FAX. ＿＿＿＿＿＿ E-mail. ＿＿＿＿＿＿＿＿

自宅住所：〒＿＿＿＿＿＿（７桁番号）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

TEL. ＿＿＿＿＿＿ FAX. ＿＿＿＿＿＿ E-mail. ＿＿＿＿＿＿＿＿

＜以下，該当するものに○をつけてください＞

会員の種別：１．正会員　２．名誉会員　３．院生会員（院生及びこれに準じる人）
　　４．学生会員（学生及びこれに準じる人）

次の４学会のうち所属しているもの：１．日本第四紀学会，２．日本岩石鉱物鉱床学会，
　　３．日本古生物学会，４．資源地質学会

英語による送付先宛名（氏名十住所）（重要！正確に書いてください！！）

NAME:＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（例：KURUMA, Torajiro）

ADDRESS:（所属先に送る場合は，所属先の英語名も明記してください）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

例：Geological Society of Japan, Maruishi Bldg., Kaji-cho 1-10-4, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0044, JAPAN

本用紙は，地質学会事務局に届くようにしてください．郵便でもファックスでもけっこうです．

〒101-0041　千代田区鍛冶町 1-10-4 丸石ビル　日本地質学会事務局　FAX. 03-5256-5676, TEL. 3252-7242.　E-mailでもけっこうです．その場合，タイトルを「The Island Arc新規購読もしくは変更届け」とし，上記項目を明記のうえ，geosocjp@ra2.so-net.or.jp (Geol. Soc. Japan)までご連絡ください．

会費請求作業との関係上，できるだけ1998年10月末までに届けていただけると助かります．

会費の「口座引落」方式導入による
「預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書」のご提出について（お願い）

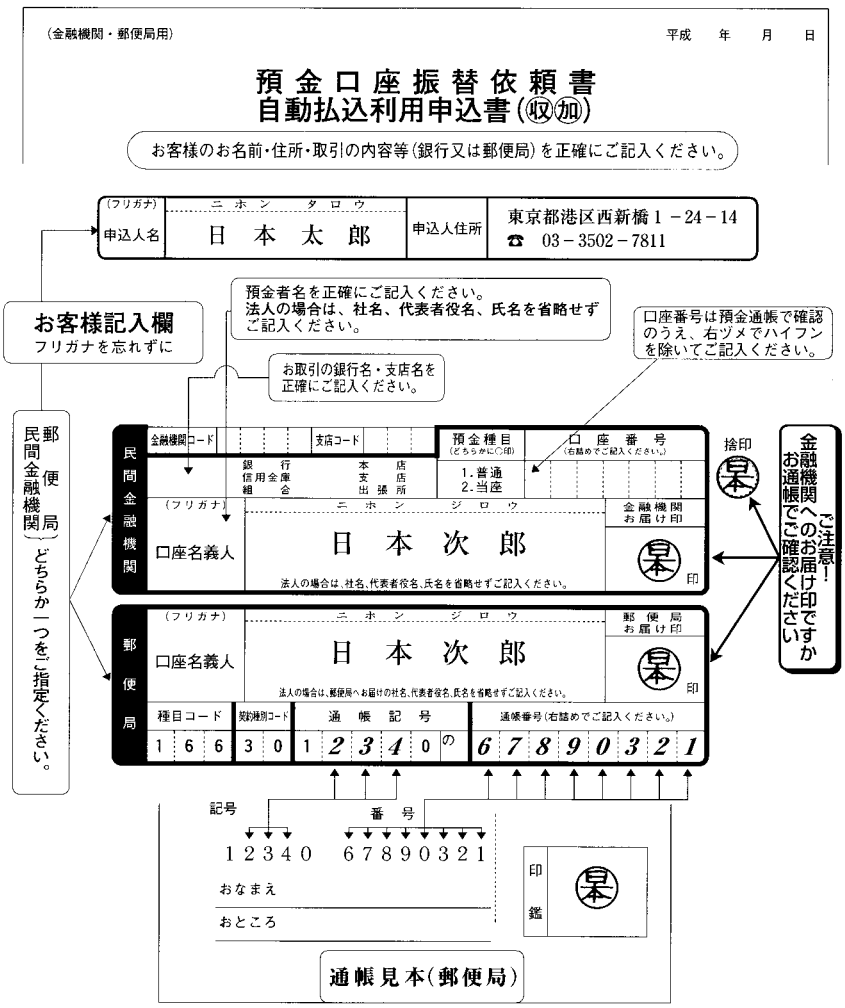
本誌7月号にてもお知らせしましたが，年会費の徴収方法として希望者を対象に「口座引落」を実施することになりました．会員の皆様には，金融機関に出向かなくても良い，振込手数料がかからない，送金忘れがない，などの便利さがありますし，事務局にとりましても事務量の軽減をはじめとする大きなメリットがあります．会計委員会としては「口座引落」を実施するにあたり，最終的には全会員のご賛同とご利用を得ることを目標にしていますが，とりあえずは3割以上の会員（おおよそ1800名）にご利用いただくことを初期目標にしたいと考えています．つきましては，できるだけ多くの会員がご利用下さいますようお願いいたします．会員各位には直接ご利用のご案内を差し上げるべきことではございますが，郵送等の経費節減のため，とりあえず本号に「預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書」をとじ込みました．1999年分の会費徴収より実施いたしますので「口座引落」を希望される会員は，必要事項を記入してお送り下さいますようお願いいたします．記入に際しては，「記入例」をご参照下さい．また，「預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書」は，封書として投函できるように作ってありますので，破損しないようお取り扱い下さい．手順としてはまず三ツ折りにした上で，①②③の順に軽くのりづけしかぶせるように封をして下さい．なお，恐れ入りますが返信切手を貼ってお出し下さるようお願いいたします．

1. 「預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書」提出期限　　11月10日（火）
2. 第1回目の「口座引落」日　12月24日（木）

（日本地質学会会計委員長　佐々木和彦）

記入例

✣ お通帳とご照合のうえ、太枠の中をボールペンで強くお書きください。



✣ ご記入に誤りがありますと、お客様へ何度もお手数をかけることになりますので、正確にご記入ください。

日本地質学会　〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町 1-10-4　丸石ビル4階　電話 03-3252-7242
Fax 03-5256-5676　E-mail : geosocjp@ra2.so-net.or.jp　ホームページ http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj/